［論文］
詩人・永瀬清子とハンセン病問題

木村　哲也（国立ハンセン病資料館）

はじめに

本稿は、詩人の永瀬清子（1906-1995年）と「ハンセン病問題」との関わりを明らかにし、その意義を考察するものである。本稿では「ハンセン病問題」の語を、国による隔離政策によって、ハンセン病患者・回復者およびその家族に重大な人権侵害が引き起こされたことを指して用いる（以下、「　」を外して表記する）。

永瀬は、1906年、岡山県赤磐郡豊田村熊山（現赤磐市）出身。父の転勤により石川県、愛知県で過ごし、高等女学校在学中から佐藤惣之助に師事し『詩之家』同人となり詩を書き始めた。1930年、第一詩集『グレンデルの母親』を発表。1945年、岡山県に帰り農業に従事しながら詩作を行った。1952年、詩誌『黄薔薇』を創刊。1987年、詩集『あけがたにくる人よ』で地球賞、ミセス現代詩女流賞を受賞。1995年、脳梗塞のため岡山済生会総合病院で死去[(1)]。

永瀬は、1949年に長島愛生園の園誌『愛生』の詩の選者を引き受けたことをきっかけとして以降、1995年に89歳で亡くなるまで、40年余にわたってハンセン病療養所の入所者と親交を持った詩人である。まだ差別・偏見が根強く残っていた時代に、外部からこれほど長きにわたってハンセン病患者・回復者と関係を持ち続けること自体がまれであった。

これまで、『ハンセン病問題に関する検証会議・最終報告書』では、「ハンセン病強制隔離政策に果たした各界の役割と責任」というテーマを立て、国や医学界だけでなく、法曹界、福祉界、教育界、宗教界、マスメディアなど各界の検証は行っているが[(2)]、文学者については取り上げられていない。

文芸活動の指導者として外部から療養所の入所者と関係を持った文学者は少なくないものの、その後も十分な研究がなされているとはいいがたいのが現状である[(3)]。当館がハンセン病問題に関する普及啓発を進めるにあたって、療養所の外部からハンセン病問題と取り組んだ文学者を分析することは、私たちがこの問題とどのように向き合ったらよいのかを考えるうえで多くの示唆をもたらす。本稿では、永瀬清子の事例分析を通して、ハンセン病問題の理解を深める一助としたい。

永瀬清子については、これまで評伝が複数出されているが、ハンセン病との関係を掘り下げて考察したものはほとんどない。

例えば、井坂洋子による著作は、永瀬清子の評伝としては最初のものであるが、ハンセン病関係への言及はない[(4)]。藤原菜穂子による評伝は、永瀬による長島愛生園での詩の指導について１行言及があるだけである[(5)]。

疋田邦男「詩人・永瀬清子と長島」は、長島愛生園の『愛生』誌上に全17回連載された、永瀬とハンセン病との関係に焦点を当てた初めての論考である[(6)]。長島愛生園で所蔵している永瀬清子書簡、長島愛生園詩話会ノートなど、貴重な一次資料に基づき叙述した意義も特筆される。しかし個々の事実と所感の提示にとどまり、掘り下げた議論の余地を残している。

井久保伊登子による評伝は、一章を割いて「憂

（1）　井久保伊登子「永瀬清子略年譜」（同『女性史の中の永瀬清子（戦前・戦中篇）』ドメス出版、2007年）463-477頁、井久保伊登子「永瀬清子略年譜」（同『女性史の中の永瀬清子（戦後編）』ドメス出版、2009年）555-562頁。

（2）　ハンセン病問題に関する検証会議編『ハンセン病問題に関する検証会議・最終報告書』（日弁連法務研究財団、2005年）303-456頁、539-605頁。

（3）　西村峰龍「当事者が語る―ハンセン病者と文学者は如何にハンセン病問題と関わったのか」（博士論文。名古屋大学、2016年）など、わずかな先例がある。

（4）　井坂洋子『永瀬清子』（五柳書院、2000年）。

（5）　藤原菜穂子『永瀬清子とともに　『星座の娘』から『あけがたにくる人よ』まで』（思潮社、2011年）160頁。

（6）　疋田邦男「詩人・永瀬清子と長島」（『愛生』第67巻第１号～第70巻第３号、2013年２月～2016年６月）。

いの島で育てた絆－ハンセン病療養所の詩人たちと」を設けるなど、言及が多数ある。「終章　歴史を拓いた女性たち」という著作全体をしめくくる章では、「世間がまだ愚かしい差別意識をもっていた敗戦直後から長島を何度も訪れて、ハンセン病詩人に親しみ、彼らの尊厳を奪回する言葉の力に感動しながら、詩の指導をしたこと」を指摘し、「清子は、ハンセン病患者の人々の哀しみを自分のものとして感じ、彼らの言葉による人間回復のために力を注いだ。それは、人間の自由と平等と尊厳を強く願う彼女の欣求（ごんぐ）の心の表れであり、言葉がもつ力への強い信頼と誇りによって得られたものと思われる」と総括している[(7)]。

しかし、本論でも述べるとおり、永瀬清子は、国による隔離政策を批判するようなことはほとんどしていない。国に対してさまざまにおこなわれた権利獲得の患者運動にも、直接力を貸した形跡はない。この点、同じ時期に外部から文学の指導者として関わりを持った詩人の大江満雄や歌人の中野菊夫が、1953年７月結成の「ライ患者の人権を守る会」に加わり、国による隔離政策を明確に批判し、文学にとどまらないさまざまな社会的運動を患者側に立って推進したのと対照的である[(8)]。そうした永瀬の関係の持ち方は、どのように評価されるべきなのかを考えてみたい。

以上をふまえ、本稿は以下のような構成で叙述される。第１章では、永瀬清子が直接関係をもった長島愛生園、邑久光明園、大島青松園（瀬戸内三園と呼ばれる）と、それぞれどのような関わり方をしたかを、主に園内誌の調査をもとに明らかにする。第２章では、永瀬清子が主宰した詩誌『黄薔薇』の調査を通じ、ハンセン病療養所の入所者とどのような関係を持ったのかを明らかにする。以上の二つの章は、これまで断片的には言及があるものの、整理されたかたちで明らかにされてこなかった基本事項を解明したものといえる。第３章では、永瀬清子による詩、選評、講演の分析を通して、ハンセン病問題に対する考えがどのようにあらわれているのかを明らかにする。最後にまとめとして、永瀬清子によるハンセン病問題への関与について、その意義を明らかにする。

なお、引用にあたっては、旧漢字は新漢字に改め、旧かなはそのままとした。また、くりかえし記号〳〵は使用しない。〔　〕は筆者による補記である。現代の人権意識に照らして不適切な語句・表現が見られるが、執筆当時の時代的背景を考慮してそのままとした。

１．瀬戸内三園それぞれとの関わり

永瀬とハンセン病療養所との直接の関係は、1949年に長島愛生園を皮切りに、邑久光明園、大島青松園に及ぶが、いわゆる瀬戸内三園に限られる。それぞれの園とどのような関係を持ったのかを、以下、簡単に述べておく。

１）長島愛生園

永瀬と長島愛生園との関わりは、園誌『愛生』、盲人会機関誌『点字愛生』での詩の選と選評、合同詩集や個人詩集への序文や跋文、園内での講演会などである。永瀬がもっとも長期にわたり、密に関係をもった療養所といってよい。

『愛生』1949年８月に「評」というタイトルで詩の選評を寄せたのが、ハンセン病療養所に関係を持つ最初であった[(9)]。

『愛生』の詩の選者を引き受けた経緯を、永瀬は「終戦後岡山県に住み地の理（ママ）を得ている事」と「先輩藤本先生の御消息不明の時期があつた事」によるものと述べている[(10)]。「藤本先生」とは詩人・藤本浩一のことで、『愛生』の詩の選者を、戦前の1935年３月より務めていた。やがて上記のような事情で永瀬が加わり、藤本と二人交互に詩の選をすることがつづくが、1955年９月を最後に藤本が選者を退き、以後、永瀬は一人で選者を務めることになる。1964年10月に寄せた「選評」が

(7)　前掲、井久保伊登子『女性史の中の永瀬清子（戦後編）』538頁。

(8)　大江満雄については、木村哲也編『癩者の憲章　大江満雄ハンセン病論集』（大月書店、2008年）、中野菊夫については、木村哲也「戦後ハンセン病療養所の短歌活動　―合同歌集『陸の中の島』を中心に―」（『国立ハンセン病資料館研究紀要』第９号、2022年３月）1-15頁。

(9)　永瀬清子「評」（『愛生』第３巻第２号、1949年８月）19頁。

(10)　永瀬清子「序」（『緑の岩礁』長島詩謡会、1951年）５頁。

最後の寄稿となった[11]。この間、141点の選評を中心とした記事を見いだすことができる[12]。

長島愛生園には盲人会の機関誌に『点字愛生』があり、その創刊号（1956年５月）[13]から詩の選評を寄せている。第67号（1972年10月）[14]まで、13点の記事が見られる。

合同詩集や個人詩集への協力は、以下のとおりである[15]。

・合同詩集『緑の岩礁』（長島詩謡会、1951年）序
・合同詩集『白い波紋』（長島詩話会、1957年）序文
・『小泉雅二詩集』（現代詩工房、1971年）序
・庸沢陵『砂漠の星座』（私家版、1974年）序
・小村義夫『花を活ける女』（長島詩話会、1979年）序、挿絵

詩の選者を辞めてからも、関係が継続していたことがわかる。

このほか、長島詩話会主催の詩画展が、1965年から1980年まで、園内で毎年15回開催されている。これは、詩と、写真や絵や版画など、他の作品を創作している療養所入所者の作品とのコラボレーションである。この試みは、岡山県詩人協会（会長・永瀬清子）が1963年から始めていたもので、永瀬の提案でその巡回展を、長島愛生園で開催（1963年５月15日～22日）したことが発端となっている[16]。1965年から1980年という時期は、ハンセン病療養所の文化活動の停滞期ともいえる時期であるが、この間、15年ものあいだ、詩話会の主催で、写真や絵画という他ジャンルとの提携で作品発表の場を維持し続けたことは特筆される。その実現に、永瀬が強く関与していたのである。

さらに永瀬は、長島愛生園訪問のたびに懇談や講演を行っている。内容の詳細が不明なものもあるが、1949年から1988年まで、少なくとも17回の長島愛生園訪問が確認される[17]。一人の文学者による一つの療養所への訪問回数としては、かなり多いといえるのではないか。講演で展開した議論については、本稿の第３章の３）で検討してみたい。

この他、永瀬が園外の媒体に発表したものとして、「長島（一九五〇年）」[18]、「光田健輔先生の祝賀会」[19]、「幸と不幸の境界」[20]、「インドへの旅」[21]、「小泉雅一」[22]などがある[23]。

２）邑久光明園

永瀬と邑久光明園との関わりは、園誌『楓』や盲人会の機関誌『白杖』での詩の選と選評、園の合同詩集の編集解説などが挙げられる。

『楓』の1952年４月に初めて名前が見えるが[24]、この時点では詩の選のみで、評はない。1953年１月に初めて「選評」が載り[25]、以来、

（11）その後、『愛生』（第26巻第１号、1972年１月）に、「離島の文学―ハンセン氏病の詩人たちと著書」（『読売新聞』1971年６月27日）から記事の抜粋が転載されている。これが『愛生』誌に永瀬の文章が掲載された最後である。

（12）永瀬清子による園内誌への寄稿については、表２「永瀬清子ハンセン病関係文献リスト（園内誌）」を参照。また、永瀬以外の書き手による園内誌の永瀬関連文献については、表６「永瀬清子ハンセン病関係文献リスト（永瀬清子以外・園内誌）」を参照。

（13）永瀬清子「選評」（『点字愛生』創刊号、1956年５月）48-49頁。

（14）永瀬清子「選評」（『点字愛生』第67号、1972年10月）24-25頁。

（15）永瀬清子による園内単行本への協力については、表４「永瀬清子ハンセン病関係文献リスト（園内単行本）」を参照。

（16）疋田邦男「詩人・永瀬清子と長島⑫」（『愛生』第69巻第１号、2015年２月）42-45頁。

（17）表１「永瀬清子の療養所訪問記録」参照。

（18）永瀬清子「長島（一九五〇年）」（『女詩人の手帖』日本文教出版、1952年）202-208頁。のち、「長島―（一九五〇年）」（『光っている窓』編集工房ノア、1984年）183-188頁。

（19）永瀬清子「光田健輔先生の祝賀会」（『かく逢った』編集工房ノア、1981年）244-249頁。

（20）永瀬清子「幸と不幸の境界」（『うぐいすの招き　日々の紀行』れんが書房新社、1983年）157-159頁。長島愛生園の庸沢陵、島田等、栗生楽泉園の小林弘明らと岡山で会う内容。

（21）永瀬清子「インドへの旅」（『すぎ去ればすべてなつかしい日々』福武書店、1990年）184-186頁。光田健輔の指示でインドのハンセン病病院を訪問したことなどを記す。

（22）永瀬清子「小泉雅一」（『流れる髪　短章集（２）』思潮社、1977年）138-139頁。長島愛生園入所者の小泉雅二のことをなぜか「小泉雅一」と記している。

（23）永瀬清子の単著に収録されたハンセン病関係のエッセイについては、表５「永瀬清子ハンセン病関係文献リスト（永瀬清子単著）」参照のこと。

（24）永瀬清子・選（『楓』第６巻第４号、1952年４月）28頁。

（25）永瀬清子「選評」（『楓』第７巻第２号、1953年１月）29頁。

1972年11月の「選評」[26] まで、54点の記事が見られる。

盲人会の機関誌『白杖』には、1973年12月の一度だけ、「選評」を寄せている[27]。

手掛けた詩集は合同詩集『光の杖』（邑久光明園慰安会、1954年）１冊に過ぎないが、詩の選と「あとがき」を執筆するなど、深い関わり方をしている。

邑久光明園には、長島愛生園と比べて少ないが、４回の訪問記録が残っている[28]。

以上が、邑久光明園における活動であるが、園外での活動としては、1955年、インドのニューデリーで開催されたアジア諸国会議に出席したさい、インドのハンセン病療養所を訪問し、邑久光明園詩作会の合同詩集『光の杖』と同詩作会による「インドの友へのメッセージ」という英文メッセージを送っている[29]。日本のハンセン病療養所の詩集を海外で紹介するという稀有な役割を、永瀬が担ったのであった。

永瀬はエッセイ集（永瀬は「短章集」と呼んでいる）に、邑久光明園入所者の堂崎しげると藤本としを紹介した「光の角度」[30]、「藤本としさん」[31]を収めている。

３）大島青松園

大島青松園との関わりで特徴的なのは、詩のグループ全体と関わりを持った長島愛生園、邑久光明園と異なり、塔和子という個人の入所者との関係に集約される点である。

永瀬が主宰する『黄薔薇』第41号（1960年３月）に、大島青松園から塔和子が初めて参加している。当時、永瀬が受け持っていたNHKラジオの文芸番組に投稿された塔の作品に永瀬が目をとめ、永瀬の方から乞うて『黄薔薇』に作品を載せたのが最初の出会いであったと永瀬は回想している[32]。

このおよそ３か月後の1960年６月４日から５日にかけて、永瀬は大島青松園に生涯一度きりの訪問をして、青松詩作会のメンバーと懇談している。この場で、やがて終生親交を持つ塔和子と初対面を果たしている。

永瀬による園内の雑誌への寄稿は、大島青松園の詩人グループである海図の会の詩誌『海図』（1962年６月）に、塔和子の第一詩集『はだか木』の批評[33]を書き送ったのが最初であるが、園誌『青松』には、1970年２月に寄稿した塔和子の第二詩集『分身』への批評[34]が唯一のものである。

園側の資料に姿をあらわす機会はこのように少ないが、後述するように、永瀬が主宰していた詩誌『黄薔薇』には、第41号（1960年３月）の初掲載以来、塔和子が毎号、詩を寄せ、主要な発表の場とした[35]。園内の資料だけを見ていると、大島青松園との関わりは薄かったように映るが、けっしてそうとはいえないことを確認しておきたい。

個人詩集への支援としては、1976年、塔和子の第四詩集『第一日の孤独』に、永瀬は「跋」を寄稿している[36]。高松市で開催された同詩集の出版記念会にも出席している[37]。

２．『黄薔薇』誌上での関わり

『黄薔薇』とハンセン病療養所の詩人たちとの関係は、これまで個々に言及されることはあっても、全体を通じた調査がなされた形跡がない。本

---

(26) 永瀬清子「選評」（『楓』第35巻第11号、1972年11月）19頁。

(27) 永瀬清子「選評」（『白杖』第76号、1973年12月）24-25頁。

(28) 表１「永瀬清子の療養所訪問記録」参照。

(29) 永瀬清子「アジアの旅の思い出より」（『楓』第９巻第８号、1955年８月）11-13頁。

(30) 永瀬清子「光の角度」（『流れる髪　短章集（２）』思潮社、1977年）133-135頁。

(31) 永瀬清子「藤本としさん」（『流れる髪　短章集（２）』思潮社、1977年）135-138頁。

(32) 永瀬清子「「はだか木」について」（『黄薔薇』第48号、1962年４月）27頁。

(33) 永瀬清子「はだか木に寄せて」（『海図』第38号、1962年６月）17頁。

(34) 永瀬清子「「分身」について 」（『青松』第27巻第２号、1970年２月）19-20頁。

(35) 『黄薔薇』には塔和子が詩を寄せただけでなく、永瀬の側も塔和子が詩集を出すたびに誌上で特集号を組み、自らも書評を手掛けている。表３「永瀬清子ハンセン病関係文献リスト（『黄薔薇』）」、表７「永瀬清子ハンセン病関係文献リスト（永瀬清子以外・『黄薔薇』）」参照。

(36) 永瀬清子「跋」（塔和子『第一日の孤独』蝸牛社、1976年）116-120頁。

(37) 前掲、井久保伊登子『女性史の中の永瀬清子（戦後篇）』368頁。

稿で初めて明らかにされるものである。

１）病みつつ詩を書く同人の存在

詩誌『黄薔薇』は、1952年８月に創刊された。中心となったのは、永瀬清子と坂本明子の２人であった。同人は、永瀬、坂本のほか、なんばみちこ（難波道子）、安井久子、安東珙美子、板口冨美子で、岡山県内に住む女性ばかり６人による同人誌であった。

もっとも、先行する詩誌『詩作』（1947年11月創刊、吉塚勤治主宰）に、永瀬清子、坂本明子、板口冨美子の３人も同人として参加していた。『詩作』は戦後、岡山県内で発行された初めての詩誌である。『詩作』第８集（1952年２月）が出た後、永瀬と坂本で、新しい同人誌をつくろうという動きが高まり、『黄薔薇』創刊につながった経緯がある[38]。

同人の坂本明子は、小児麻痺で歩けない身体であった。また、板口冨美子は、腹部腫瘍から回復したが寝たきりの状態であった[39]。永瀬のごく身近に、病気でありつつ詩を書く同人の存在があったことは、後にハンセン病療養所の詩人たちと共に詩を書くにあたって、きわめて重要な先行例だったのではないだろうか。ハンセン病を特別視することなく、病気と闘いながら詩を書く仲間として迎え入れる素地が『黄薔薇』にはすでにあったのである。

２）社会問題への参加の契機

永瀬清子は、ある時期まで詩に、直接的な政治的主張を入れなかったことで知られる。ところが『黄薔薇』創刊以降、次第に政治的主張を鮮明に打ち出すようになるとの理解が、従来の永瀬清子論では一般的である[40]。

ここで永瀬の社会問題へのスタンスを知るために、主な経歴を年表風に摘記すると以下のようになる[41]。

1948年４月	豊田村婦人会長になる。
1949年８月	長島愛生園　詩の選者となる（～1972年10月まで）。
1952年４月	邑久光明園　詩の選者となる（～1973年12月まで）。
1952年８月	『黄薔薇』創刊。
10月	豊田村教育委員選挙で当選。
1953年12月	詩「原爆の図の作者へ」（『黄薔薇』第９号）発表。
1954年４月	米・英・ソ・インド大使館に核実験反対陳情書を提出。
６月	『黄薔薇』第12号で水爆特集号。
1955年４月	インド・ニューデリー開催のアジア諸国民会議に熊山町婦人会長として出席。
６月	第１回日本母親大会（東京）に出席。
８月	第１回原水爆禁止世界大会（広島）に出席。
1959年１月	岡山地方裁判所調整委員に任命される。
1963年３月	岡山県文化課の世界連邦岡山県協議会事務局嘱託に就職。1977年５月退職。
1979年２月	戦争を語りつぐ岡山婦人の会『8.15前後―戦争と私たち』刊行。
1982年５月	岡山女性史研究会の会長となる。

数ある社会問題への参加のなかで、ハンセン病との関わりが最初期に見られることがわかる。農作業と家事で家に縛りつけられていた主婦が、30キロ離れた離島の療養所で詩を書く入所者とつながる機会を得たのである。永瀬が必ずしも自覚的にそう記している形跡はないのだが、ハンセン病の詩人たちと出会ったことが、その後の社会問題

(38)　前掲、井久保伊登子『女性史の中の永瀬清子（戦後篇）』230-232頁。

(39)　このほか、『詩作』には、早川定男、古本哲夫、道満誠など、国立岡山療養所（結核）から療養者の参加も見られた。前掲、井久保伊登子『女性史の中の永瀬清子（戦後篇）』160-163頁。

(40)　井久保伊登子は、「『黄薔薇』を創刊したあと、社会活動へと転換した清子」と述べている。前掲、井久保伊登子『女性史の中の永瀬清子（戦後篇）』302頁。藤原菜穂子は、「「黄薔薇」発刊に力を得たかのように、清子は一気に外部に向かって行動し始めた」と同様の指摘をしている。前掲、藤原菜穂子『永瀬清子とともに』160頁。

(41)　前掲、井久保伊登子「永瀬清子略年譜」556-558頁をもとに、ハンセン病関連の事項を筆者が加えた。

への視野を広げたともいえるのではないだろうか。

3）ハンセン病療養所からの参加

1956年８月、『黄薔薇』第25号刊行のあと、坂本明子、なんばみちこ（難波道子）、安東珙美子、小林美和子、中田喜美、岡崎道子、津崎和子、池見澄江の８人が、永瀬を残していっせいに同人を辞めるという事件が起きる。永瀬に対する不満によるものだったようだが、このことは永瀬にとって挫折となる出来事であった。

同人が去った後、『黄薔薇』の再起をはかるなかで、第31号（1957年９月）以降ハンセン病療養所から詩の投稿が始まる。永瀬清子追悼号の第143号（1995年７月）までの『黄薔薇』すべてを調査した結果は、以下のとおりである（詩以外の短文なども含む）。

長島愛生園
- 島村静雨…第31号（1957年９月）から第45号（1961年３月）にかけて９篇。
- 志樹逸馬…第７号（1953年８月）１篇。没後、第44号（1961年１月）１篇。
- 島田等…第143号（1995年７月）１篇。

邑久光明園
- 堂崎しげる…第32号（1957年12月）と第34号（1958年５月）２篇。
- 秋田穂月…第72号（1971年12月）１篇。

大島青松園
- 塔和子…第41号（1960年３月）から第143号（1995年７月）にかけて139篇[42]。
- 中石としお…第48号（1962年４月）１篇。

星塚敬愛園
- 国本稔…第79号（1975年６月）から第104号（1982年７月）にかけて10篇。

以上の８人が参加していることが判明した。永瀬が直接関係した瀬戸内三園の詩人が中心であるが、例外は国本稔で、星塚敬愛園からの参加である。国本の詩集『化石』（私家版、1981年）に収録された詩の大半は『黄薔薇』が初出であるが、そのことを国本自身は詩集で全く触れておらず、『黄薔薇』に直接当たらないと知ることができない。

関係が抜きんでているのが先にも見た大島青松園の塔和子である。ほぼ毎号、詩の掲載が見られ、塔にとっても『黄薔薇』が主要な作品発表の場であったことが明らかである。詩碑が建立されている代表作「胸の泉に」なども、初出は『黄薔薇』であった[43]。

4）『黄薔薇』同人のハンセン病療養所訪問

永瀬は、ハンセン病療養所から作品を募るだけでなく、『黄薔薇』同人を伴って、療養所を訪れることも少なくなかった。絶えず双方向の関係を保ちつづけている。

1953年１月18日～19日、『黄薔薇』同人の難波道子・小林美和子・中田貴美・安東芙美子と長島愛生園訪問。小林、中田は日帰り、他は宿泊している[44]。

1958年12月14日、参議院議員の高良とみと共に長島愛生園を訪問する際、『黄薔薇』同人の藤原菜穂子も同伴している[45]。

1960年７月９日～10日、長島愛生園にて、岡山県詩人連盟（委員長・永瀬清子）による「現代詩について」講座を、永瀬と小野十三郎を講師として開催した際、『黄薔薇』同人の藤原菜穂子も同伴している[46]。

1971年２月７日、長島愛生園に、『黄薔薇』同人の吉田稔と共に訪問している[47]。

ハンセン病療養所の入所者が、外の世界に目を向けるよう促すために、永瀬は意識的に外部の知

（42）今回は永瀬清子追悼号の『黄薔薇』（第143号、1995年３月）までの作品数調査である。塔和子はこのあとも『黄薔薇』誌上に作品を発表しつづけている。最後の投稿は塔和子「（詩碑に彫る）」（『黄薔薇』第183号、2008年６月）76頁。

（43）塔和子「胸の泉に」（『黄薔薇』第98号、1980年10月）２頁。のち、『青松』第44巻第２号、1987年２月に転載。

（44）小林美和子「長島訪問記（一）」、難波道子「長島訪問記（二）」、永瀬清子「編集後記」（いずれも『黄薔薇』第４号、1953月２月）。

（45）「愛生日誌（一二月）」（『愛生』第13巻第２号、1959年２月）62頁、永瀬清子「編集後記」（『黄薔薇』第37号、1959年３月）裏見返し。

（46）永瀬清子「編集後記」（『黄薔薇』第43号、1960年９月）裏見返し。

（47）座談会「プラスの詩マイナスの詩」（『裸形』第43号、1971年４月）。

人を伴って療養所を訪問し、出会いの機会をつくっていたと推測される。同時にこれは、訪問する側にも、療養所の入所者と出会い、関係を深めてほしいと期待しての行動ではなかっただろうか[48]。永瀬は両者をつなぐ架け橋の役割を進んで買って出ていたのである。

３．永瀬清子の詩、選評、講演に見るハンセン病観

本章では、永瀬清子による詩作品、選評、講演などの分析を通して、ハンセン病療養所の詩人たちに何を伝えようとしたのか、また永瀬の側がハンセン病療養所の詩人たちから何を得ようとしたのかを明らかにしてみたい[49]。

１）詩

園内誌のために書き下ろされた永瀬の詩作品は発表順に以下の５篇である[50]。

「哀悼詩」『愛生』1951年６月（貞明皇后追悼号）
「貴方がたの島へ」『愛生』1951年10月
「癩について」『楓』1954年11月[51]
「あれは樹だと」『愛生』1960年３月
「光田先生」『愛生』1964年８月（光田健輔追悼号）

永瀬は、園外の詩誌に発表した「不可触賤民」をはじめとするインドの旅からうまれたアジアの貧困や差別などを主題とした作品や、沖縄問題をうたった「沖縄」、被爆地広島をうたった「歩いてくる夾竹桃」など、反戦・平和を基調とした作品の一群があり、それらを自ら詩集におさめている[52]。しかし、ハンセン病を主題とする作品は、一篇も詩集に収録していない。詩集だけ読んでいる読者には、永瀬はハンセン病を主題に詩を書いていないかのような印象を与える。

園内誌に発表されたままとなってきた永瀬によるハンセン病を主題とした詩作品の検討も、本稿が初めての試みである[53]。

哀悼詩[54]

かぎりなくうつくしき陽の光とも
仰ぎまつりし大きさいの宮
思はざる黒雲にかくれたまいし
初夏の瀬戸の島忽ちくらし

悩めるわれらにあたゝかき御手さしのべて
母のごとくにいたわりたまいし日々のこと
思ふだにかしこし　かなし
かへらぬ乳したふ　おさなごのごと

朝夕に聴きては祈る
みめぐみの鐘こそとはに尽きず
御心のなほもひゞきて
尊くもいますごと　我らをはげましむ

ハンセン病「救済」に深く関与した貞明皇后への敬意にあふれた詩である。文語体が採用されていることにも、貞明皇后に対するかしこまった永瀬の心境がよくあらわれている。貞明皇后を「母」、ハンセン病療養所の入所者を「おさなご」に見立てており、皇后を慈母、いつくしみ深い母親とする、戦前以来の「救らい」のイデオロギーをそのまま反映しており、永瀬はこの点に批判的視点は

(48) このほか、『黄薔薇』同人の坂本明子は、永瀬の紹介で長島愛生園の『愛生』（第８巻第８号 ～第９巻第５号、1954年８月～ 1955年５月）と、邑久光明園の『楓』（第９巻第３号～第36巻第６号、1955年４月～ 1973年８月）の詩の選者を務めている。また、同じく『黄薔薇』同人の木澤豊は、『愛生』（第46巻第３号～第50巻第３号、1992年３月～ 1996年３月）の詩の選者をつとめている。

(49) 詩、選評、講演のほか、永瀬の場合、手紙が果たした役割が大きいが、資料の制約上、割愛せざるをえない。永瀬は療養所の人びとにこまめに手紙を書く人であった。永瀬との手紙のやりとりを印象深く語る人は多い。島田等「永瀬さんと長島詩話会」（『黄薔薇』第143号、1995年７月）77頁、中山秋夫「思い出すままに（詩人・永瀬清子先生を偲んで）」（『白杖』第153号、1998年４月）8-13頁。

(50) このほか、「焔について」（『愛生』第５巻第７号、1951年７月）が掲載されているが、詩集『焔について』（千代田書院、1950年）の中から既存の詩を転載したものであり、園内誌のために書き下ろされた詩ではないのでここでは除外する。

(51) 「癩について」は『黄薔薇』（第14号、1954年10月）にひと足早く掲載されているが、作品の最後に1954年９月17日の日付があり、『黄薔薇』掲載より早く『楓』編集部に届いていた可能性を推測させる。

(52) 『（続）永瀬清子詩集』（思潮社、1982年）収録。

(53) 園外の詩誌に発表されたハンセン病を主題とした作品については、永瀬清子「憂ひの島にて」（『詩作』第８号、1952年２月）があることが、前掲、井久保伊登子『女性史の中の永瀬清子（戦後編）』202-205頁で紹介されている。

(54) 永瀬清子「哀悼詩」（『愛生』第５巻第６号、1951年６月）７頁。

持ち合わせていなかったことが、この詩からはうかがえる[55]。

光田先生[56]

光を求めて
ひとりの道を歩いてこられた。
闇の中でも
おそれず歩いてこられた。

大きな栄光が最後に貴方を飾つても
私の眼に残るのは
園長室でひつそり
アルミのお弁当箱で食べていられた姿。

神経痛の足をひきずりながら
診療室の前までよぼよぼと来た貴方は
新しい来島者を前に
鷲のように機敏な動作と若々しいまなこで、
のこる隈なく診察された。
それは病者のすべてを被う姿だつた。

それは病者の過去をいたわり
未来を守る姿だつた
心と身体のとりでだつた。

ほめそやされても笑つていられた、
打ちひしがれても笑つていられた。

光田先生
その足跡は土にふかくきざまれた。
その比べるものなき義(ただ)しさの故に
又その苦しさの故に—

ここでも、隔離政策の推進者である光田健輔への批判はみられない。上記２つの詩は貞明皇后と光田健輔の追悼号に追悼詩の寄稿を求められて書いた詩であるのだから当然とはいえ、「書かない」という選択肢もあるなかで、これらの詩を永瀬は書いたのである[57]。

永瀬は、1950年の長島愛生開園20周年の記念式典に参列し、この日の模様を伝えるエッセイで、光田を「癩病が遺伝であるとの迷信が根づよくはびこっていたためのいたましい不幸を、科学と愛とで守りぬい」たと賞讃している[58]。

また、1955年にインドのニューデリーで開催されたアジア諸国会議に出席したさい、光田のすすめでインドのハンセン病病院を訪問している。

この時、インドでは、自宅から通院・服薬して治療する方式を採用しているとの説明を永瀬は受けている。これを受けて永瀬は、「日本で今新たな病者が出ておらず、病者が減少している事からみて、全寮制の光田方式が日本ではよかったのだと思うが、インドのあり方と比較する事は私にはむずかしい」との判断を示している[59]。

永瀬は、日本の患者が減った要因を隔離政策によるものと見て、それによる人権侵害の実態には思い至っていない模様だ。インドでの通院投薬治療の実態を目の当たりにしながら、なお光田が唱えてきた隔離政策を支持するのが、この時点（1955年）での永瀬清子の認識であった。

残る３つの詩、「貴方がたの島へ」「癩について」「あれは樹だと」を順番に見ていく。

貴方がたの島へ[60]

貴方がたの島へ
私は何かを受けとりにゆくのです
いつも人々からの愛を受けとつて
精神(こころ)は着ぶくれてゐる貴方がたから
私は何かをうばひにゆくのです
さあ私に何かを下さい、病める人々よ。

(55) 永瀬は晩年の1987年、皇太子妃・美智子に東宮御所に招かれている。反戦平和の言論活動をしてきた永瀬は「迷った」が、その後都合３回、美智子の求めに応じて面会している。前掲、井久保伊登子『女性史の中の永瀬清子』481-486頁。このことからも、永瀬の皇室へのスタンスを知ることができる。

(56) 永瀬清子「光田先生」（『愛生』第18巻第６号、1964年８月）28-29頁。

(57) ちなみに長島愛生園入所者の島田等は、同じ号に、「追悼詩　故光田健輔先生に捧ぐ」を書き、光田を痛烈に批判している（『愛生』第18巻第６号、1964年８月）50-51頁。

(58) 前掲、永瀬清子「長島（一九五〇年）」203頁。

(59) 前掲、永瀬清子「インドへの旅」185頁。

(60) 永瀬清子「貴方がたの島へ」（『愛生』第５巻第10号、1951年10月）10-11頁。

私はいたゞきに来ました。
この島へ来る人々は
いつも愛の言葉を置いてゆく。
私の愛はごくお粗末、
それでゐて私は貪慾に
貴方がたからいたゞきたいのです。
なぜなら私は施こしを恵むだけではあき足りない。
私に喜びを下さい。
血泥の病気をいたましく思つたり、
呻きや涙をあはれんだりするだけではまだ足りない。
私は同情しにゆくだけではいやです。
私に見せて下さい、立派なお友達であるあかしを。
貴方がたは何を私に贈(く)れやうと心配なさる。
肉体の病気の中にくじけぬ人間、
ありとあらゆる苦しみの涙と膿汁の中の助け合ひ、
昼夜なき痛みや不自由の中の雄々しいいのち
さうしたものを見出して私はふるひ立つのです。
願くば私を喜ばせ勇気を下さい。
それを下さつてこそ貴方がたは私の友達。
くじけずひるまず暮す人々を見ることこそ私の喜び。
さあ私に沢山のものを贈つて下さい。

女性としていかに解放されるか、人間らしく詩を書くかが永瀬が生涯にわたって取り組んだテーマであった。「清子は、欠乏を認識することで詩を書いた」と言われる[61]。事情や境遇は異なるが、同じく「欠乏」を起点に、なおそれにくじけず詩を書くハンセン病の人びとと、永瀬は出会ったのである。

「肉体の病気の中にくじけぬ人間、／ありとあらゆる苦しみの涙と膿汁の中の助け合ひ、／昼夜なき痛みや不自由の中の雄々しいいのち／さうしたものを見出して私はふるひ立つのです。」という詩句は、詩の指導をするだけでなく、彼らからも学び「ふるひ立」ちたいという関係の双方向性が目指されている。

一方で、何かを得るとは「何かをうばひにゆく」ことでもある、という自覚に立っている。「ありとあらゆる苦しみの涙」「昼夜なき痛みや不自由の中」で想像を絶するように生きているハンセン病療養所の人びとと、どのようにしたら同じ地平に立って関係を結べるかを、社会問題の解決という方向ではなく、個人としての付き合いの問題として思いめぐらせていることが特徴的である。

癩について[62]

松籟のしぶきに青く染みながら
人々は皮膚の一部を死につゝあつた
追いついてくる鮫に眼をあたえ腕をあたえ
むなしい仮面をかぶつた
長い黒い服には鈴をつけた
その心は季節にしばしばたわみつゝ
旅立つた故郷にむかつて夜毎に飛翔した
誰も知らない夜更に
そのはゞたきは常に空を渡つた
しづかに佇みほそい笛の音がしている時もあつたが
時に物狂ほしく獅子面をおそうものを
彼等は忍んで見せまいとした
自らの苦しむことで人を驚かすまいと
その髯を岩かげにかくした
やさしい彼等の心が昇天する時
彼等を悩ましていた臭衣は
たちまち一つかみの藻草のようにたくれたゝまれた

一九五四、九、一七

隔離政策によって故郷と切り離されて生きているハンセン病療養所の入所者にとって、故郷は特別な場所である。この詩では、「旅立つた故郷にむかつて夜毎に飛翔した」とうたわれている。永

(61)　前掲、井久保伊登子『女性史の中の永瀬清子』441頁。同様の指摘は、前掲、藤原菜穂子『永瀬清子とともに』255-256頁にも見られる。
(62)　永瀬清子「癩について」（『楓』第８巻第11号、1954年11月）25-26頁。

瀬にとって空への飛翔とは、戦前の代表詩「諸国の天女」[63] にも見られた重要なモチーフである。現実世界でさまざまな制約のある生活に苦しむ人間が（永瀬詩のなかではそれは多くの場合「女性」であるが）、束の間、自由に天空を飛翔する心の自由を思い描く。ここでも、そのような自由への想像力のもつ力を詩に託して、ハンセン病療養所の入所者へ書き送ったと見ることができる。

あれは樹だと [64]

あれは樹だとみんな思つているのは
たゞその樹の皮だ
あれは綿羊だとみんな思つているのは
たゞそのむく毛だ
春になつて
皮の窪みがしづかにふくらんでくるのは
樹がもつと土地の中に食いこんでいるからだ
土地と樹は区切りをつけられないから
同じいのちと見てもよい
五月になれば
やがて大きな鋏で毛を切りとつて
羊の身は軽くなるだろう
その毛をどんな役にたてると云つたつて
羊自身は知らない事だ

病気の人のいのちも
水仙の花が沢山かたまり咲いているのと同じに
深い所で何一つちがわない
松の木の皮と檜の皮とどうちがうのか
何がどんな役にたつのか
それは私には判らない

さげづ（ママ）まれてふるえる心もあるし
讃えられて豪（ママ）慢な心もある
打ちくだかれてちらばるものが
あの流れ去る河水のコバルトの中に
三月まばゆく輝いているものと同じなのだ
河床のかぎりない砂利の故に――

物事の表面だけを見て全体を判断することの愚を言っている。「差別」や「偏見」などという言葉は使っていないが、外見を理由に生じるそれらに照準を定めてうたわれており、ハンセン病療養所の入所者との出会いがなければ、永瀬はこのような詩を着想することはなかったのではないかと思わせる。「病気の人」も深部では「同じいのち」を生きているのだという主題は明快であるが、表現は複雑である。

３篇の詩を通してわかるのは、ハンセン病を経験している人びとを主題としながら、なお人間として普遍的なものをうたおうとする永瀬の姿勢である。

２）選評

（１）「美」という評価基準

永瀬清子のハンセン病関連の仕事のなかで、もっとも主要な仕事は、療養所の園内誌の詩の選者を務めたことであった。それではいったいどのような基準で詩を選び、評価していたのであろうか。

すべての選評に目を通していえることは、詩の「テーマ」への言及はあまり見られず、あくまでも詩の「表現」に向けた批評が中心であるという点である。こうした姿勢は、「ハンセン病問題」を告発する作品の主題そのものへのコメントは避ける一方で、表現への着目を通じて、書き手その人への批評や励ましとなってあらわれた。

本項では、選評のなかから、よい面の指摘と、わるい面の指摘をそれぞれ摘記してみたい。

まず、わるい面の指摘では、以下のような評言が見られる。

「少し型にはまつた用ひ方」[65]。「やや観念的な点があります」[66]。「比喩すこしくマンネリズムの

（63） 永瀬清子「諸国の天女」（『諸国の天女』河出書房、1940年）5-7頁。
（64） 永瀬清子「あれは樹だと」（『愛生』第14巻第３号、1960年３月）12-13頁。
（65） 永瀬清子「評」（『愛生』第３巻第４号、1949年12月）41頁。
（66） 永瀬清子「選評」（『愛生』第５巻第７号、1951年７月）40頁。

感があります」[67]。「いくらか観念的なきらいがあるようです」[68]。「最初の章は説明的に思えるので」[69]。「一寸型にはまつた感じ」[70]。「甘い陶酔的な感じ」[71]。「すこし一人合点な所が多かつたり、又理屈がすぎたりしている」[72]。「やや理屈つぽい」[73]。「甘い感じもします。それは少し観念的な所があるからです」[74]。「すこし理屈ぽくなつています」[75]。「説明的な文章なのでそれが惜しい」[76]。

キーワードとして集約してみると、「型にはまった」、「観念的」、「マンネリ」、「説明的」、「理屈っぽい」、「陶酔的」などの語が目立つ。永瀬は選評を書く際、美辞麗句に終わらず、わるい点も直言する流儀であったことがわかる。

一方、よい面の指摘では、以下のような評言が見られる。

「技巧的にたくみです」[77]。「いきいきしている」[78]。「すなほな詩」[79]。「すなおな見方のうちに、面白い感情移入がみられます」[80]。「淡々と書かれていて無限の愛情をひびかせている点完璧なものだと思います」[81]。「無限の哀愁がひそんでいます」[82]。「理屈に終つていない所、美しいと思います」[83]。「非常に緊張していて美しい」[84]。「はるかに強い意志と達観を持つています。その点で美しく思われます」[85]。「感傷に陥らずして、無限の哀愁をもつている」[86]。「非常にすなほな書き方がしてあるのでよいと思ひます」[87]。「今すこし美しいものがほしいと云う感じでした。自分の苦痛や悲しさも、美意識を通じてかかれる時、（きれいごとと云う意味ではなく）生きてくるように思うのです」[88]。「実に無駄なく効果的に書かれ、しかも美しいと思います」[89]。

キーワードとしては、「素直さ」、「無限」、「哀愁」などの語句が抽出できるが、何といっても「美しい」が最頻出のタームである。

永瀬清子の第一詩集『グレンデルの母親』（歌人房、1930年）の「自序」は、有名な次の詩句で締めくくられている。

「芸術は鬣（たてがみ）のようなもの／彼自身の奔る時にこそ美しい旗じるしの如くある。／これは別に奔る道具ではないのだが。／私はそのやうに芸術したいと思ふ。／わが鬣よ、なびけ」[90]。

ここで、「美しい」という語が、永瀬にとって

(67)　永瀬清子「評」（『愛生』第５巻第12号、1951年12月）34頁。
(68)　同前、38頁。
(69)　永瀬清子「選評」（『愛生』第６巻第５号、1952年５月）36頁。
(70)　永瀬清子「選評」（『愛生』第７巻第１号、1953年１月）30頁。
(71)　同前、30頁。
(72)　永瀬清子「選評」（『楓』第７巻第２号、1953年１月）29頁。
(73)　永瀬清子「選評」（『愛生』第７巻第２号、1953年２月）13頁。
(74)　永瀬清子「選評」（『愛生』第７巻第７号、1953年７月）50頁。
(75)　永瀬清子「選評」（『楓』第７巻第８号、1953年８月）22頁。
(76)　永瀬清子「選評」（『愛生』第７巻第９号、1953年９月）55頁。
(77)　永瀬清子「評」（『愛生』第３巻第４号、1949年12月）41頁。
(78)　永瀬清子「評」（『愛生』第４巻第４号、1950年９月）26頁。
(79)　同前、28頁。
(80)　永瀬清子「選後評」（『愛生』第６巻第３号、1952年３月）32頁。
(81)　永瀬清子「四月号詩作品評」（『愛生』第６巻第４号、1952年４月）29頁。
(82)　永瀬清子「選後評」（『愛生』第６巻第６号、1952年６月）49頁。
(83)　永瀬清子「選評」（『愛生』第６巻第11号、1952年11月）92頁。
(84)　永瀬清子「選評」（『愛生』第７巻第１号、1953年１月）30頁。
(85)　永瀬清子「選評」（『愛生』第７巻第２号、1953年２月）13頁。
(86)　同前、13頁。
(87)　永瀬清子「選後評」（『楓』第７巻第５号、1953年４月）20頁。
(88)　永瀬清子「選評」（『愛生』第７巻第９号、1953年９月）55頁。
(89)　永瀬清子「選評」（『楓』第８巻第２号、1954年２月）30頁。１
(90)　永瀬清子「自序」（『グレンデルの母親』歌人房、1930年）３頁。

の芸術の旗じるしとして、象徴的に使われている[91]。

戦後、岡山県に落ち着き、農作業をしながら出した最初の詩集は『美しい国』（爐書房、1948年）であった。この詩集には、「美しい国を創くるために」「美しい世界」「美しい娘たち」「美しい縞」など、「美しい」という語が頻出する[92]。

1956年に坂本明子ら８人の同人が『黄薔薇』をいっせいに去ったあと、新たに『黄薔薇』に加わり編集を助けた藤原菜穂子の回想によると、編集や割り付け作業をしている間に、「「いい詩」とは何において量るのですか」と質問すると、永瀬は即座に「美において量る」と答えたという[93]。

永瀬清子が詩人としてのデビュー以来、生涯にわたって重視していた「美しさ」という基準で、ハンセン病療養所の詩を評価していたことが改めて確認できる。詩人として自己に課したのと同等の基準でもって、ハンセン病療養所の詩人たちの作品に向き合っていたことがうかがえるのである。

（２）個性への認識

さらに、永瀬清子の選評の特徴としていえるのは、書き手一人一人の個性の指摘において際立っているという点である。例えば、８つの療養所から73人が参加した合同詩集『いのちの芽』（三一書房、1953年）の書評で永瀬は、書き手一人一人の名前を挙げ、自分がとらえたその詩人や作品の個性を列挙してゆく。やや長いが、引用する。

「全生園では厚木さんの詩がこの詩集の中でもきわ立つてすぐれていると思います。九篇すべてよいものですが中でも「聖母子」が好きです。人間のいたましさとそれを許す心あはれみなどが何一つ説明的な文句のないうちにうかがはれています。すべて厚木さんの詩は高い知性とのびやかな言葉で特長づけられています。その他全生園の方々の詩にはすべて歯ぎれのよい知的な感覚があります。愛生園では志樹さんの詩がやはりよう御座いました。私がお近づきになつたはじめの頃の、「班斑の譜」や「水」などもいいですが、「園長さん」などはやはり人に書けないと思います。森さんはするどい感覚でピシリと打つような一行をはめこんでいます。死んでから一羽の小鳥になつてはじめて微笑した男などと云う詩もいいです。「朝顔」も好きでした。はじめてよんだ時の方がよりよかつた気もします、どこがなほされているのか判りませんが。小島さんは「絵」のようなのもいいのですが全体に重厚な詩が多く、今すこし感覚的のが入つていたらと思ひます。しかしまじめな性格は遺憾なく出ています。島村さんが戦争に従軍した人だと云うことははじめて知りました。「展望哨」が今までの中でもいゝものだと思います。中本さんのは熱情的な詩が多く力のあるものでした。吉成さんのも暖い愛情のふかい詩です。甲斐さんのは短いせいか、言葉がすこし固いせいか、やや観念的に思へます。豊田さんのはもすこし切りつめて最初の章など二行くらいにした方がいゝでしよう。森中さんのは今度みるとすこしまとめ方が悪いように思へます。「指の底には」の聯を「潮のひいた潟のように殺風景です」の次ぎに入れてはどうですか。原田さんは今まで知りませんでしたが詩はしつかりした内省によつています。愛生園の方でせうか。瀬戸さんのは題材が面白く象徴的ですが意図がはつきりしていないようです。今すこし構成的にかくといいでしよう。／青松園の恵美かおるさんは言葉の美しさをよく自得しています。すぐれています。上野さん中石さんらもよいです。戸田さんはすなほです。／光明園では堂崎しげるさんの詩がまじめであり松本さんの杖がいいと思います。／敬愛園では北河内さんのがよかった。佐藤僣〔俊〕二さんのは、ニヒリスチツクなものですが本音だと思います。／恵楓園の重村一二さん楽泉園の谺雄二さん又所属不明ですが

(91) のちに永瀬清子が長島愛生園を訪れて講演をしたさいにも、冒頭で『グレンデルの母親』の自序の詩句を挙げ、「私の一番早く作っていた詩集にも〔略〕芸術というものはたてがみのような物であって、自分が本当に一生懸命に生きるというときに美しくなびくのである。というふうに書いていたのですけれども、〔略〕やっぱり今でも私は同じような感じで持っている訳なのです」と述べている。「自分の立場で歴史を―永瀬清子先生講演より」（『裸形』第40号、1970年３月）12頁。

(92) 前掲、藤原菜穂子『永瀬清子とともに』135頁の指摘による。

(93) 前掲、藤原菜穂子『永瀬清子とともに』175頁。

榊原不二男、高橋晴緒の諸氏の作品が目にとまりました（以下略）」[94]。

同じ『愛生』誌上に『いのちの芽』出版記念として掲載されている他の評者と比較しても、永瀬の評の個性へのとらえ方は際立っている。

このように個々の作者名を挙げて作品への評価を連ねていく姿勢は、例えば邑久光明園の合同詩集『光の杖』の「あとがき」でも一貫している。

書き手一人ひとりを名もない書き手として扱うのではなく、文字通り名前を持った個人としてそれぞれの個性をとらえようとする姿勢が、このような選評の書き方にあらわれている。

（3）変化をとらえる眼

一人ひとりの個性への着目は、やがて個別の書き手の変化をとらえる評へとつながってゆく。

「今までのものが、ふつ切れたような自然さが出て来て、志樹〔逸馬〕さんの新しい詩が始まつて来た感じです」[95]。

「〔志樹逸馬に対して〕このごろ何をかいてもよくなつたのにおどろきます」[96]。

「志樹〔逸馬〕さんの詩は現実を一たん濾して、そこに救いの世界を顕出している所すでに及びがたい境地に来ているように思います。はじめはこれがやや理屈つぽく感じられた時代もありましたが、この一ヶ年は更に飛躍されたことを嬉しく思います」[97]。

「島村静雨さんのは今までにない飛躍でした。何かしら突然ふつ切れたと云うように気持が流露しているので、それをよろこんで一度に三篇ともいただいておきました」[98]。

「島村〔静雨〕さんの詩は、その主題の捕え方が非常に以前とちがつて来ました」[99]。

「ここしばらく随分豊田〔志津雄〕さんは成長されたと思います」[100]。

「庸沢〔陵〕さんの今度の詩は大変自然で楽な姿をしながら、心の訴えがよくつかんであつて今迄拝見した庸沢さんのものの中でも最もいいものの一つになるのではないかと思います」[101]。

「〔全体の傾向として〕一時のように激烈な身振や感傷が少くなつたのと、ひどく判りにくい表現も少なくなり、一般に落ついた作品がふえ水準の高まりを感じさせます」[102]。

このように、一人ひとりの成長や自立の契機をしっかりととらえて、そこへ向けてあたたかな評を送る。これが永瀬清子の選評のもう一つの特徴である。

一方でそのような姿勢は、書き手への仮借ない直言にもつながった。大島青松園の塔和子の第二詩集『分身』について、ひとわたり賞讃の言葉を述べた後、「ただそこにいくらか苦言を呈したい詩もあります」と切り出し、以下のように指摘している[103]。

まず「比喩の言葉が簡単に選ばれすぎている」、「詩が流れるように書けすぎている」ということを永瀬は欠点として指摘し、「新らしい面を開拓〔する、略〕状態が生じれば、行と行の間は却って飛躍をしたり変化をみせたりすると思いますが、つまりは下手でたどたどしいその状態が貴方にもすこしほしい」、「貴方はもつと外界を見なくてはならないと思います」とアドバイスを送るのであった[104]。

---

(94)　永瀬清子「「いのちの芽」雑感」（『愛生』第７巻第10号、1953年10月）21-22頁。

(95)　永瀬清子「選後評」（『愛生』第６巻第３号、1952年３月）32頁。

(96)　永瀬清子「選評」（『愛生』第６巻第12号、1952年12月）35頁。

(97)　永瀬清子「選評」（『愛生』第７巻第１号、1953年１月）30頁。

(98)　永瀬清子「選後に」（『愛生』第６巻第１号、1952年１月）31頁。

(99)　永瀬清子「選評」（『愛生』第９巻第４号、1955年４月）23頁。

(100)　長（ママ）瀬清子「選評」（『愛生』第９巻第10号、1955年10月）34頁。

(101)　永瀬清子「選評」（『愛生』第13巻第２号 、1959年２月）26頁。

(102)　永瀬清子「選評」（『愛生』第11巻第11号、1957年11月）92頁。

(103)　永瀬清子「「分身」について」（『青松』第27巻第２号、1970年２月）19頁-20頁。

(104)　栗生楽泉園の詩人・谺雄二は「塔和子？　いまひとつだったねぇ。塔和子は闘わない詩〔だ〕」と評しているが、その当否は措くとしても、塔和子のあまりにも内省的な詩の特徴を、谺雄二も永瀬清子も同じように察知して指摘していると見ることもできる。姜信子編『死ぬふりだけでやめとけや　谺雄二詩文集』（みすず書房、2014年）130頁。

その６年後、永瀬は塔和子の第四詩集『第一日の孤独』の跋文で、上記の苦言を呈した過去の評に触れつつ、以下のように述べている。

「以前には第二詩集の頃、私は彼女に今すこし物そのものを視るように、と忠告した事があ〔った、略〕のですが、以後の塔さんは必ずしも私が云った方向にはすすまず、外部を視ること、そしてそれをとり入れる楽しみを身につける方へ、は行きませんでした」と、塔が永瀬の忠告を聞き入れることはなかったと見ている。しかしつづけて、「第三詩集、そして今度の詩集では、私の予期しなかったくらい内面的な自分を肥し、同じ視るにしても内部の眼で物を照らし出すよう自分を駆使できるようになったと思います」とし、その変化を、「私は心から彼女のために祝いたい」と述べた[105]。

このように、塔和子が、内省的な詩の世界を成熟させつつあることを、最終的には書き手の個性として肯定的に評価するのであった。塔和子も亡くなるまで、永瀬が主宰する『黄薔薇』に作品を発表しつづけるという良好な関係をつづけた。

３）講演

（１）詩で歴史を刻む

永瀬清子は訪問した療養所で、入所者と懇談したり、乞われて講演をしたりしている。

現在、確認できる懇談、講演の内容がわかる記録は、すべて長島愛生園のものであるが、

・1969年11月５日の講演記録…「自分の立場で歴史を―永瀬清子先生講演より」[106]。
・1971年２月７日の座談の記録…永瀬清子・吉田稔「プラスの詩マイナスの詩」[107]。
・1978年４月20日の講演記録…「永瀬清子先生をむかえて（一）」、「永瀬清子先生を迎えて（二）」[108]。

以上３件（４篇）である。比較的、時代が下ってからの記録が多いので、永瀬の晩年の認識の変化や成熟を知るには格好のテキストである。

本節では、1969年11月５日、長島愛生園にて開催された講演記録「自分の立場で歴史を」を中心に、永瀬が療養所の詩人たちに何を期待して伝えていたのかを明らかにする。

永瀬は、自分の詩の師である佐藤惣之助の詩「千八百五十四年に」[109]を紹介している。

これは1854年、ペリー艦隊が下田を去るとき、無名の水夫たちが裏山の木にナイフで記念に自分のイニシアルを落書きとして彫った痕跡を、のちに佐藤が実際に下田で見て書いた詩である。

歴史に残るペリー提督ではなく、歴史に名前も残っていない水夫たちの落書きを半世紀後に見て、その人たちを想像して詩にうたった佐藤惣之助の姿を永瀬は思い描くのである。

永瀬はさらにその半世紀後に下田を訪れて、50年前の詩と100年前の落書きに思いを馳せている。その直後に、この講演はなされている。

「だから貴方がたは、そこにね何か彫りつけておいてもらいたい。そうしたら、らいというものも、なにも、あの怖いもんでもなくなるし、それからこういう療養所も作らなくてもいいような社会も、いつかくるだろうけどね。そのときに彫りつけていたものを、また誰かが見つけてね。又誰かを打つというようなものになるんじゃないかと思うんです」[110]。

自分の生きた証を彫り込む水夫のように詩を書いてほしい、必ずその詩に目をとめる人が現れるはずだから、という永瀬の言葉には、同時代の評価を得ることとは別の価値が目指されている。療養所の人びとの書く詩が、歴史を越えて人の胸を打つことへの確信と期待がこめられていた。

（105）永瀬清子「跋」（塔和子『第一日の孤独』蝸牛社、1976年）118頁。
（106）前掲、「自分の立場で歴史を―永瀬清子先生講演より」12-19頁。
（107）永瀬清子・吉田稔「プラスの詩マイナスの詩」（『裸形』第43号、1971年４月）10-15頁。
（108）「永瀬清子先生をむかえて（一）」（『裸形』第54号、1978年８月）6-11頁、「永瀬清子先生を迎えて（二）」（『裸形』第55号、1978年12月）6-11頁。
（109）佐藤惣之助「千八百五十四年に」（『満月の川』叢文閣、1920年）2-14頁。
（110）前掲、「自分の立場で歴史を―永瀬清子先生講演より」18-19頁。

（２）ハンセン病文学の固有性と普遍性

永瀬はまた、講演中、村上昭夫の詩集『動物哀歌』（思潮社、1968年）の中から「雁の声」を朗読している。村上は結核療養をしながら詩を書き、詩集を出した翌年、結核で他界した詩人であった。

「私は治らない病気を持っているから／それで雁の声が聞えるのだ／治らない人の病は／あの果てのない／宇宙の果ての深さと同じだ」

村上昭夫の詩「雁の声」を引いて、以下のように述べている。

「貴方がたの手によらなければできないようなことも沢山あるんじゃないか、ひとつの記録にしても病気のことを記録にしていくにしても、心の中のことを記録にしても私たちにできないような仕事が沢山この園の中にはあると思う。それはちっとも私たちの社会と、そんなに違ったものじゃない」[111]。

ここで述べられていることは、ハンセン病文学のもつ固有性と普遍性の問題である。すなわち、ハンセン病を患った経験があるものにしか書けない詩がある（固有性）その一方で、その詩で表現されている問題というのは、私たちの社会が抱える問題とそう違うものではない（普遍性）との指摘である。

同様の問題意識は、講演記録だけでなく、永瀬清子の書くものにもあらわれている。上記の講演が行われたのとほぼ同時期、あるハンセン病詩人の詩集に、次のような言葉を寄せている。

「私はこの集の詩は、癩者の書いた詩として最もすぐれたクラスに入るものと思うが、それは癩文学と云うような特別の枠を意味するのでなく、日本の現代詩のレベル、又文学の意味する凡そ現代的な精神をこめて云ってよいと思う」[112]と文学としての普遍的な価値を賞讃する一方で、次のようにも述べる。

「けれど彼の体験したかぎり実態はやはり癩なのだ。人のみる眼も病気のいたましさも。（略）彼の壁はどこに居場所を移そうと逃げようとついて廻り、突破するにはついに詩のほかなかった」[113]。

書き手が直面したハンセン病をめぐる諸問題との格闘から生まれた詩が、ハンセン病文学という固有性を保ちつつ、同時に現代日本の文学としての普遍性も持つのだという評価である。

ややもすると私たちは、「これは単なるハンセン病文学を超えた普遍的な詩ですね」などと軽々に言うが、これとは別の見方を、永瀬の評は教えてくれる。あくまでも、ハンセン病固有の問題と切り離さずに、彼らの詩を受けとる姿勢をもちたい。

４．おわりに

最後に、永瀬がハンセン病の人びととの出会いを通じて、ハンセン病問題とどのように関わり、認識を深めていったか、その意義をまとめて本稿を閉じたい。

詩に、政治的主張を入れることがなかった永瀬が、1952年の『黄薔薇』創刊以降から反戦・平和などについて積極的に行動し、作品を通じても発信してゆく姿勢に転換したことはつとに知られている。本稿では、それより早い1949年にハンセン病療養所と関係を持ったことが、その後さまざまな社会問題へ視野を広げた起点とすることができるのではないかという見方を提示した。

一見すると永瀬には、ハンセン病隔離政策から生じるさまざまな人権侵害への批判、問題解決への発言はほとんどなく、この点、隔離政策反対を鮮明にして積極的な行動をし、発言をつづけた同時代の文学者の大江満雄や中野菊夫らとは対照的に映る。しかし、永瀬は言動の範囲を「文学活動」の枠に限定することで、他の文学者とはまた別のタイプの成果をもたらすことに成功したのであった。

永瀬は、1953年10月の『黄薔薇』の編集後記に、「心なやますことの一つは又長島の人々の事でもありました」[114]と、謎めいた一文を書きつけている。前後にこれ以上の説明がなく、これだけでは

（111）前掲、「自分の立場で歴史を―永瀬清子先生講演より」16頁。
（112）永瀬清子「序」（『小泉雅二詩集』現代詩工房、1971年）３頁。
（113）同前、3-4頁。
（114）永瀬清子「編集後記」（『黄薔薇』第８号、1953年10月１日）24頁。

意図するところがはっきりしないが、1953年８月には戦後の隔離政策を定めた「らい予防法」が成立しており、法案への対応をめぐって長島愛生園では穏健派と強硬派が衝突、1953年７月には光田健輔の胸像が強硬派によって破壊される事件が起こり、９月には光田に対する園長辞職要求が起こっている[115]。おそらくこれらの動きを受けてのコメントと考えて差し支えないであろう。長島愛生園入所者間における分断は、長島詩話会のメンバーにも持ち込まれており[116]、彼らと関わり続けるうえで、永瀬はどちらに肩入れすることもできず、ハンセン病問題への発言（特に光田への批判）を控える選択をせざるを得なかったのではないだろうか。その結果、穏健派の詩人とも、急進派の詩人とも、共に末永い付き合いを続けることが可能となったのである[117]。

光田への個人的な敬意は終生変わることのなかった永瀬だが、ハンセン病療養所の現状を追認していたわけではなかった。療養所の人びとが、「旅立つた故郷にむかつて夜毎に飛翔した」とする詩（「癩について」1954年）を園内誌に送り、隔離政策による故郷との分断を詩のなかで越えようと試みている。時代が下って1968年には、「らいが特別のことであつた昔にくらべ、いまはだんだんすべてのことに通じる事象の一つに変つています」[118]と、時代の変化に伴い、ハンセン病を特別視する社会の見方も変化していることを述べている。1969年の講演では、「らいというものも、なにも、あの怖いもんでもなくなるし、それからこういう療養所も作らなくてもいいような社会も、いつかくるだろうけどね」[119]と、やがては療養所への隔離政策を必要としない社会の到来を見越した発言もしている。

最晩年の1990年、邑久光明園の中山秋夫の句集（川柳集）[120]の書評では、「対岸を社会とよんで病み耄（ほう）け」の句を引き、「対岸への橋は架かっても、「社会」の人はもう決して差別しないかどうか？彼等はその病気が治るものと信じているだろうか？すべてまだまだ寂しき人々の苦は解けない」と、いまなお社会に残る偏見や差別に苦しむ人びとがいることを読者に訴えている。また、「無為徒食国の重さの飯三度」の句を引いて、「「国」よりも重いものがあろうか。その重さ〔の飯〕を与える方は恩恵と信じ、与えられる者は苦悩の代償にしかすぎぬ」と述べている[121]。永瀬はここで初めて「国」に言及し、隔離政策を「恩恵」として施してきた皇室や光田健輔らに代表される国の「救らい」思想にも一定の批判を示すに至るのである。のちに「らい予防法違憲国家賠償請求訴訟」の原告として国の責任を問うこととなる中山秋夫の作品を通じて、永瀬もハンセン病問題への認識を改め、深化させていることが確認できるであろう。

永瀬は、このようにハンセン病問題への認識を変化させつつも、療養所の人びととは、詩を書くことのみに限定した付き合いをつづけていくことになる。永瀬が同人として参加した『詩作』や主宰した『黄薔薇』には、病気と闘いながら詩を書く同人が複数いた。ハンセン病療養所の人びととの付き合いが始まる以前からの関係である。病む人としてではなく、詩を書く人間としてその人と向き合うという姿勢は、永瀬にとっては早くから身についたものであり、終始一貫している。

あくまでも、詩という限定的な回路を通じてだったとはいえ、永瀬の活動は多方面に及んだ。長島愛生園と邑久光明園では長らく詩の選者として選評を担当し、また個人詩集や合同詩集の出版の協力を惜しまなかった。離島の療養所で詩作す

(115) 長島愛生園入園者自治会編『隔絶の里程—長島愛生園入園者五十年史』（日本文教出版、1982年）300-301頁。

(116) 1999年３月17日、長島愛生園にて近藤宏一氏より筆者聞き書き。

(117) 穏健派の志樹逸馬らと親しく付き合っただけでなく、急進派の島田等や、邑久光明園入所者で国の政策に批判的な中山秋夫からも肯定的な評価をなされている。前掲、島田等「永瀬さんと長島詩話会」77頁。前掲、中山秋夫「思い出すままに（詩人・永瀬清子先生を偲んで）」8-13頁。

(118) 永瀬清子「詩集「つくられた断層」への言葉」（『裸形』第35号、1968年８月）16頁。

(119) 前掲、「自分の立場で歴史を—永瀬清子先生講演より」19頁。

(120) 中山秋夫『父子独楽』（私家版、1989年）。

(121) 永瀬清子「中山秋夫句集『父子独楽』について」（『黄薔薇』第126号、1990年６月）18-19頁。

る塔和子に対して、「貴方はもつと外界を見なくてはならない」[122] と直言したのも、隔離政策によって閉じ込められた人びとに、詩を通じて外部の社会へと視野を広げるよう促すためであったろう。『黄薔薇』を療養所入所者の作品発表の場として積極的に開放したことも、隔離施設の中から外部へと作品を解き放つ役割を果たした。18回にのぼる療養所訪問のさいには、たいてい他のだれかを伴っている。自分だけでなく多くの人が、療養所の詩人たちと直接出会う機会を持つべきであると意図した結果と思われる。

以上のように、永瀬清子は、詩を書くことのみに限定した付き合いの範囲に限っても、その中で可能な限り多岐にわたる活動を展開した稀有な詩人であったことが明らかとなるのである。

永瀬には、詩が書けなくなるスランプの時期がいくつかあることが知られている。そのうちの一つが、公私ともに苦境に立たされ、勤務生活にも入って多忙をきわめた1955年から1965年までの「暗黒時代」[123]。さらに、1972年『海は陸へと』から1987年『あけがたにくる人よ』を上梓するまで詩を書けなくなった「苦の時代」[124] とされている。

その詩が書けない「暗黒時代」「苦の時代」にあって、永瀬はハンセン病の人びとの詩の選評を休まずつづけ、個人詩集の出版に協力することを通して、それらの詩から力を得ていたのである。お互いを必要とする関係がなければ、これほど長期にわたる関係はつづかなかったであろう。

長島愛生園と邑久光明園の所在する長島には、1988年５月９日に邑久長島大橋が開通し、離島ではなくなる。長島に橋が架かったことについて、永瀬は以下のように感懐を述べている。

「「瀬戸大橋」もまだ見にゆけず「長島大橋」もまだ。しかし詩とはもともと橋かける事なのではないか。自己と他者の。或は自己と社会（よ）との」[125]。

邑久長島大橋は、1972年の長島架橋促進入園者委員会の結成により架橋への動きが本格化し、16年間もの粘り強い運動を経て、ようやく架橋が実現したのが1988年であった。架橋運動のスローガンとなった「人間回復の橋」という言葉の発案者は、永瀬と共に詩を書き、長島愛生園詩話会会長もつとめた島村静雨である（島村は第４代架橋促進委員長もつとめた）[126]。

1988年８月、永瀬は初めて邑久長島大橋を渡って、最後の長島愛生園訪問を果たしている[127]。

交通不便な時代から、毎回船で長島の療養所の詩人たちに会い、関係を築いてきた永瀬にとって、隔離の島に橋が架かることは、感慨ひとしおであったろう。

「詩とはもともと橋かける事なのではないか。自己と他者の。或は自己と社会（よ）との」という言葉は、隔離の時代に詩を通じて一般社会との回路を開き、40年に及ぶハンセン病療養所の詩人たちとの交流を経て、晩年の永瀬清子がたどりついた詩論であった。

謝辞

本稿作成にあたり、以下の機関と個人にお世話になりました。記して感謝申し上げます。

赤磐市教育委員会熊山分室（白根直子氏）、岡山県立図書館、国立国会図書館、日本近代文学館（順不同）。

（122）前掲、永瀬清子「「分身」について」19頁-20頁。

（123）前掲、井久保伊登子『女性史の中の永瀬清子』452頁。なお、「公私」の「公」とは1956年『黄薔薇』同人８人が同時脱退したこと、「私」とは1955年夫が定年退職したが再就職せず、家計を支えるために永瀬自身が就職することにしたことを指す。同前、291頁。

（124）同前、451頁。

（125）永瀬清子「編集後記」（『黄薔薇』第121号、1988年６月）裏見返し。

（126）「邑久長島大橋架橋運動関係史年表」（『橋を渡る　邑久長島大橋架橋30周年記念』国立ハンセン病資料館、2018年）147頁。

（127）前掲、井久保伊登子『女性史の中の永瀬清子』561頁。

表１．永瀬清子の療養所訪問記録

年月日	内　　容	出　　典
1949年５月23日	長島愛生園訪問。宮沢賢治「雨ニモ負ケズ」を朗読。	志樹逸馬「後書」（『愛生』第３巻第３号、1949年９月）47頁。
1950年11月20日	長島愛生園開園20周年記念行事に出席。	永瀬清子「長島（一九五〇年）」（『女詩人の手帖』日本文教出版、1952年）202-208頁
1951年９月15日	長島愛生園訪問。合同詩集（のちに『緑の岩礁』として刊行）の書名などに意見。	疋田邦男「詩人・永瀬清子と長島③」（『愛生』第67巻第３号、2013年６月）24頁。
1952年１月23日	長島愛生園に、詩人の戸塚八重子と洋裁の講師として訪問。愛生婦人会、詩謡会等と懇談会。	「愛生日誌」（『愛生』第６巻第２号､1952年２月）43頁。
1953年１月18日-19日	長島愛生園に、『黄薔薇』同人の難波道子・小林美和子・中田貴美・安東芙美子と訪問。小林、中田は日帰り。他は宿泊。自作詩「鎌について」朗読。	小林美和子「長島訪問記（一）」、難波道子「長島訪問記（二）」、永瀬清子「編集後記」（『黄薔薇』第４号、1953月２月１日）15-16頁。
1953年11月３日	長島愛生園、秋の文芸祭に各部門の選者が招待され、詩の選者として出席。	疋田邦男「詩人・永瀬清子と長島⑦」（『愛生』第68巻第１号、2014年２月）37頁。
1954年９月16日-17日	邑久光明園訪問、宿泊。翌日、長島愛生園へ。	永瀬清子「編集後記」（『黄薔薇』第14号、1954年10月１日）22頁。
1955年８月10日	長島愛生園、邑久光明園に、真壁仁、上林猷夫と訪問。	永瀬清子「一九五五年夏」「編集後記」（『黄薔薇』第20号、1955年10月１日）19頁、26頁。
1955年11月25日	長島愛生園25周年記念式典に出席。	疋田邦男「詩人・永瀬清子と長島⑧」（『愛生』第68巻第３号、2014年６月）36頁。
1957年４月17日	長島愛生園訪問。志樹逸馬と面会。	永瀬清子「編集後記」（『黄薔薇』第29号、1957年５月）裏見返し。志樹逸馬日記『(S. 32.) 1957 9』（個人蔵）。
1958年12月14日	長島愛生園、邑久光明園に、高良とみ、藤原菜穂子と訪問。	「愛生日誌（一二月）」『愛生』第13巻第２号、1959年２月）62頁。永瀬清子「編集後記」（『黄薔薇』第37号、1959年３月）裏見返し。
1960年６月４日-5日	大島青松園訪問。１泊。『海図』同人と懇談。塔和子と初対面。	永瀬清子「編集後記」（『黄薔薇』第43号、1960年９月）裏見返し。黒田義雄「長瀬清子さんを迎えて」（『青松』第17巻第９号、1960年９月）31-33頁 。
1960年７月９日-10日	長島愛生園にて､岡山県詩人連盟（委員長･永瀬清子）による「現代詩について」講座。小野十三郎、藤原菜穂子と訪問。邑久光明園も訪問。	永瀬清子「編集後記」（『黄薔薇』第43号、1960年９月）裏見返し。庸沢陵「詩人小野十三郎・永瀬清子先生一行三名（写真）」（『愛生』第14巻第10号、1960年10月）表紙見返し。
1969年11月３日	長島愛生園に、文学講演会のため、小倉豊文、白井たつ子と共に訪問。	永瀬清子「自分の立場で歴史を（講演録）」（『裸形』第40号、1970年３月）12-19頁。
1971年２月７日	長島愛生園に、『黄薔薇』同人・吉田稔と訪問。	座談会「プラスの詩マイナスの詩」（『裸形』第43号、1971年４月）10-15頁。
1976年５－６月の間〔日付の詳細不明〕	※高松市で開かれた、塔和子詩集『第一日の孤独』出版記念会に出席。	井久保伊登子『女性史の中の永瀬清子』（戦後編、ドメス出版、2009年）368頁。
1978年４月20日	長島愛生園訪問。	永瀬清子「編集後記」（『黄薔薇』第90号、1978年５月）27頁。「座談会　永瀬清子先生を迎えて（一）」（『裸形』第54号、1978年８月）6-11頁、「同（二）」（『裸形』第55号、1978年12月）6-11頁。
1979年４月13日	長島愛生園に、上林猷夫、間野捷魯、重政順平と訪問。	永瀬清子「会合三つ」（『黄薔薇』第94号、1979年８月）17頁。
1988年８月	最後の長島愛生園訪問。戸塚八重子と。	井久保伊登子『女性史の中の永瀬清子』（戦後編、ドメス出版、2009年）561頁。

※印は療養所への訪問ではないが、永瀬と療養所入所者との接点を伝える事実としてあえて示した。

表２．永瀬清子ハンセン病関係文献リスト（園内誌）

No	書名	号数	発行所	刊行年月	著者名	表題	備考
1	愛生	第３巻第２号	長島愛生園慰安会	1949年８月	永瀬清子	評	
2	愛生	第３巻第４号	長島愛生園慰安会	1949年12月	永瀬清子	評	
3	愛生	第４巻第３号	長島愛生園慰安会	1950年８月	永瀬清子	＜長島詩謡＞	選のみ、評なし。
4	愛生	第４巻第４号	長島愛生園慰安会	1950年９月	永瀬清子	評	
5	愛生	第４巻第７号	長島愛生園慰安会	1950年12月	永瀬清子	＜長島詩謡＞	選のみ、評なし。
6	愛生	第５巻第３号	長島愛生園慰安会	1951年３月	永瀬清子	＜長島詩謡＞	選のみ、評なし。
7	愛生	第５巻第４号	長島愛生園慰安会	1951年４月	永瀬清子	＜長島詩謡＞	選のみ、評なし。
8	愛生	第５巻第５号	長島愛生園慰安会	1951年５月	永瀬清子	＜長島詩謡＞	選のみ、評なし。
9	愛生	第５巻第６号	長島愛生園慰安会	1951年６月	永瀬清子	哀悼詩	自作詩。貞明皇后追悼号。
10	愛生	第５巻第７号	長島愛生園慰安会	1951年７月	永瀬清子	焔について	自作詩。詩集『焔について』より転載。
11	愛生	第５巻第７号	長島愛生園慰安会	1951年７月	永瀬清子	選評	
12	愛生	第５巻第９号	長島愛生園慰安会	1951年９月	永瀬清子	＜長島詩謡＞	選のみ、評なし。
13	愛生	第５巻第10号	長島愛生園慰安会	1951年10月	永瀬清子	貴方がたの島へ	自作詩
14	愛生	第５巻第10号	長島愛生園慰安会	1951年10月	永瀬清子	選評	
15	愛生	第５巻第12号	長島愛生園慰安会	1951年12月	永瀬清子	評	
16	愛生	第６巻第１号	長島愛生園慰安会	1952年１月	永瀬清子	選後に	
17	愛生	第６巻第２号	長島愛生園慰安会	1952年２月	永瀬清子	選評	
18	愛生	第６巻第３号	長島愛生園慰安会	1952年３月	永瀬清子	選後評	
19	愛生	第６巻第４号	長島愛生園慰安会	1952年４月	永瀬清子	四月号詩作品評	
20	楓	第６巻第４号	邑久光明園慰安会	1952年４月	永瀬清子	＜楓詩壇＞	選のみ、評なし。
21	愛生	第６巻第５号	長島愛生園慰安会	1952年５月	永瀬清子	選評	
22	愛生	第６巻第６号	長島愛生園慰安会	1952年６月	永瀬清子	選後評	
23	愛生	第６巻第11号	長島愛生園慰安会	1952年11月	永瀬清子	詩謡選評	
24	愛生	第６巻第12号	長島愛生園慰安会	1952年12月	永瀬清子	選評	
25	愛生	第７巻第１号	長島愛生園慰安会	1953年１月	永瀬清子	選評	
26	楓	第７巻第２号	邑久光明園慰安会	1953年１月	永瀬清子	選評	
27	愛生	第７巻第２号	長島愛生園慰安会	1953年２月	永瀬清子	選評	
28	愛生	第７巻第３号	長島愛生園慰安会	1953年３月	永瀬清子	＜長島詩謡＞	選のみ、評なし。
29	愛生	第７巻第４号	長島愛生園慰安会	1953年４月	永瀬清子	選評	
30	楓	第７巻第５号	邑久光明園慰安会	1953年４月	永瀬清子	選後評	
31	愛生	第７巻第５号	長島愛生園慰安会	1953年５月	永瀬清子	選評	
32	楓	第７巻第６号	邑久光明園慰安会	1953年５月	永瀬清子	選評	
33	愛生	第７巻第６号	長島愛生園慰安会	1953年６月	永瀬清子	選評	
34	愛生	第７巻第７号	長島愛生園慰安会	1953年７月	永瀬清子	選評	
35	楓	第７巻第７号	邑久光明園慰安会	1953年７月	永瀬清子	選評	
36	愛生	第７巻第８号	長島愛生園慰安会	1953年８月	永瀬清子	選評	
37	楓	第７巻第８号	邑久光明園慰安会	1953年８月	永瀬清子	選評	
38	愛生	第７巻第９号	長島愛生園慰安会	1953年９月	永瀬清子	選評	
39	楓	第７巻第９号	邑久光明園慰安会	1953年９月	永瀬清子	選評	
40	愛生	第７巻第10号	長島愛生園慰安会	1953年10月	永瀬清子	選評	
41	愛生	第７巻第10号	長島愛生園慰安会	1953年10月	永瀬清子	『いのちの芽』雑感	詩集『いのちの芽』特集
42	楓	第７巻第10号	邑久光明園慰安会	1953年10月	永瀬清子	寄稿手紙	
43	楓	第７巻第10号	邑久光明園慰安会	1953年10月	永瀬清子	選評	
44	愛生	第７巻第11号	長島愛生園慰安会	1953年11月	永瀬清子	詩選評	
45	楓	第７巻第11号	邑久光明園慰安会	1953年11月	永瀬清子	選評	
46	愛生	第７巻第12号	長島愛生園慰安会	1953年12月	永瀬清子	＜文芸祭作品佳作集＞	選のみ、評なし。
47	楓	第７巻第12号	邑久光明園慰安会	1953年12月	永瀬清子	選評	
48	愛生	第８巻第１号	長島愛生園慰安会	1954年１月	永瀬清子	選評	
49	楓	第８巻第１号	邑久光明園慰安会	1954年１月	永瀬清子	選評	
50	楓	第８巻第２号	邑久光明園慰安会	1954年２月	永瀬清子	選評	
51	愛生	第８巻第３号	長島愛生園慰安会	1954年３月	永瀬清子	選後評	
52	楓	第８巻第３号	邑久光明園慰安会	1954年３月	永瀬清子	選評	
53	愛生	第８巻第４号	長島愛生園慰安会	1954年４月	永瀬清子	選評	
54	楓	第８巻第４号	邑久光明園慰安会	1954年４月	永瀬清子	選評	
55	楓	第８巻第５号	邑久光明園慰安会	1954年５月	永瀬清子	選評	
56	愛生	第８巻第６号	長島愛生園慰安会	1954年６月	永瀬清子	選評	
57	楓	第８巻第６号	邑久光明園慰安会	1954年６月	永瀬清子	選評	
58	楓	第８巻第６号	邑久光明園慰安会	1954年６月	永瀬清子	＜童詩＞	選のみ、評なし。

No	書名	号数	発行所	刊行年月	著者名	表題	備考
59	愛生	第８巻第７号	長島愛生園慰安会	1954年７月	永瀬清子	選評	
60	楓	第８巻第７号	邑久光明園慰安会	1954年７月	永瀬清子	選評	
61	楓	第８巻第８号	邑久光明園慰安会	1954年８月	永瀬清子	選評	
62	楓	第８巻第９号	邑久光明園慰安会	1954年９月	永瀬清子	選評	
63	愛生	第８巻第10号	長島愛生園慰安会	1954年10月	永瀬清子	選評	
64	楓	第８巻第10号	邑久光明園慰安会	1954年10月	永瀬清子	＜双葉欄＞	選のみ、評なし。
65	愛生	第８巻第11号	長島愛生園慰安会	1954年11月	永瀬清子	詩の選後に	
66	楓	第８巻第11号	邑久光明園慰安会	1954年11月	永瀬清子	癩について	自作詩。『黄薔薇』第14号（1954年10月）が初出。
67	楓	第８巻第11号	邑久光明園慰安会	1954年11月	永瀬清子	選評	
68	楓	第８巻第12号	邑久光明園慰安会	1954年12月	永瀬清子	選後評	
69	楓	第８巻第12号	邑久光明園慰安会	1954年12月	永瀬清子	選評	
70	楓	第８巻第12号	邑久光明園慰安会	1954年12月	永瀬清子	童詩選評	
71	愛生	第９巻第１号	長島愛生園慰安会	1955年１月	永瀬清子	選評	
72	楓	第９巻第１号	邑久光明園慰安会	1955年１月	永瀬清子	選評	
73	愛生	第９巻第２号	長島愛生園慰安会	1955年２月	永瀬清子	選評	
74	楓	第９巻第２号	邑久光明園慰安会	1955年２月	永瀬清子	少年の部選評	
75	楓	第９巻第２号	邑久光明園慰安会	1955年２月	永瀬清子	選評	
76	愛生	第９巻第３号	長島愛生園慰安会	1955年３月	永瀬清子	選評	
77	楓	第９巻第３号	邑久光明園慰安会	1955年３月	永瀬清子	童詩選後評	
78	楓	第９巻第３号	邑久光明園慰安会	1955年３月	永瀬清子	選評	
79	愛生	第９巻第４号	長島愛生園慰安会	1955年４月	永瀬清子	選評	
80	愛生	第９巻第８号	長島愛生園慰安会	1955年８月	永瀬清子	アジアの旅を終りて	
81	楓	第９巻第８号	邑久光明園慰安会	1955年８月	永瀬清子	アジアの旅の思い出より	
82	愛生	第９巻第10号	長島愛生園慰安会	1955年10月	永瀬清子	選評	
83	愛生	第９巻第11号	長島愛生園慰安会	1955年11月	永瀬清子	選評	
84	愛生	第９巻第11号	長島愛生園慰安会	1955年11月	永瀬清子	西﨑道子「島をたづねて」評	
85	愛生	第９巻第12号	長島愛生園慰安会	1955年12月	永瀬清子	選評	
86	愛生	第10巻第１号	長島愛生園慰安会	1956年１月	永瀬清子	選評	
87	愛生	第10巻第２号	長島愛生園慰安会	1956年２月	永瀬清子	選評	
88	愛生	第10巻第３号	長島愛生園慰安会	1956年３月	永瀬清子	選評	
89	愛生	第10巻第４号	長島愛生園慰安会	1956年４月	永瀬清子	選評	
90	愛生	第10巻第４号	長島愛生園慰安会	1956年４月	永瀬清子	書評・島村静雨著『狂った季節の中で』	『黄薔薇』第20号（1955年10月）より転載。
91	点字愛生	創刊号	長島愛生園慰安会	1956年５月	永瀬清子	選評	
92	愛生	第10巻第５号	長島愛生園慰安会	1956年５月	永瀬清子	選評	
93	愛生	第10巻第６号	長島愛生園慰安会	1956年６月	永瀬清子	選評	
94	愛生	第10巻第７号	長島愛生園慰安会	1956年７月	永瀬清子	選評	
95	愛生	第10巻第８号	長島愛生園慰安会	1956年８月	永瀬清子	選評	
96	愛生	第10巻第９号	長島愛生園慰安会	1956年９月	永瀬清子	選評	
97	愛生	第10巻第10号	長島愛生園慰安会	1956年10月	永瀬清子	選評	
98	愛生	第10巻第11号	長島愛生園慰安会	1956年11月	永瀬清子	選評	
99	楓	第10巻第11号	邑久光明園慰安会	1956年11月	永瀬清子	選評	
100	楓	第10巻第11号	邑久光明園慰安会	1956年11月	永瀬清子	児童詩選評	
101	愛生	第10巻第12号	長島愛生園慰安会	1956年12月	永瀬清子	選評	
102	愛生	第11巻第１号	長島愛生園慰安会	1957年１月	永瀬清子	選評	
103	愛生	第11巻第２号	長島愛生園慰安会	1957年２月	永瀬清子	選評	
104	愛生	第11巻第３号	長島愛生園慰安会	1957年３月	永瀬清子	＜詩＞	選のみ、評なし。
105	愛生	第11巻第４号	長島愛生園慰安会	1957年４月	永瀬清子	選評	
106	愛生	第11巻第５号	長島愛生園慰安会	1957年５月	永瀬清子	選評	
107	愛生	第11巻第６号	長島愛生園慰安会	1957年６月	永瀬清子	選評	
108	愛生	第11巻第７号	長島愛生園慰安会	1957年７月	永瀬清子	選評	
109	楓	第20巻第７号	邑久光明園慰安会	1957年７月	永瀬清子	選評	
110	愛生	第11巻第８号	長島愛生園慰安会	1957年８月	永瀬清子	選評	
111	愛生	第11巻第９号	長島愛生園慰安会	1957年９月	永瀬清子	選評	
112	楓	第20巻第９号	邑久光明園慰安会	1957年９月	永瀬清子	童詩選評	
113	愛生	第11巻第10号	長島愛生園慰安会	1957年10月	永瀬清子	選評	
114	愛生	第11巻第11号	長島愛生園慰安会	1957年11月	永瀬清子	選評	
115	楓	第20巻第11号	邑久光明園慰安会	1957年11月	永瀬清子	選評	
116	愛生	第11巻第12号	長島愛生園慰安会	1957年12月	永瀬清子	選評	
117	愛生	第12巻第１号	長島愛生園慰安会	1958年１月	永瀬清子	選評	

No	書名	号数	発行所	刊行年月	著者名	表題	備考
118	愛生	第12巻第３号	長島愛生園慰安会	1958年２月	永瀬清子	選評	
119	愛生	第12巻第４号	長島愛生園慰安会	1958年３月	永瀬清子	選評	
120	愛生	第12巻第５号	長島愛生園慰安会	1958年４月	永瀬清子	選評	
121	愛生	第12巻第６号	長島愛生園慰安会	1958年５月	永瀬清子	選評	
122	愛生	第12巻第６号	長島愛生園慰安会	1958年５月	永瀬清子	作文選評	
123	愛生	第12巻第６号	長島愛生園慰安会	1958年５月	永瀬清子	児童詩選評	
124	愛生	第12巻第７号	長島愛生園慰安会	1958年６月	永瀬清子	選評	
125	愛生	第12巻第８号	長島愛生園慰安会	1958年７月	永瀬清子	選評	
126	愛生	第12巻第９号	長島愛生園慰安会	1958年８月	永瀬清子	選評	
127	愛生	第12巻第10号	長島愛生園慰安会	1958年９月	永瀬清子	詩選評	
128	愛生	第12巻第11号	長島愛生園慰安会	1958年10月	永瀬清子	詩選評	
129	楓	第21巻第10号	邑久光明園慰安会	1958年10月	永瀬清子	全国募集詩選評	
130	楓	第21巻第10号	邑久光明園慰安会	1958年10月	永瀬清子	童詩評	
131	愛生	第12巻第12号	長島愛生園慰安会	1958年11月	永瀬清子	詩選評	
132	愛生	第12巻第13号	長島愛生園慰安会	1958年12月	永瀬清子	選評	
133	点字愛生	第11号	長島愛生園慰安会	1958年12月	永瀬清子	選評	
134	愛生	第13巻第１号	長島愛生園慰安会	1959年１月	永瀬清子	選評	
135	裸形	第５号	裸形の会	1959年１月	永瀬清子	詩の領土	
136	愛生	第13巻第２号	長島愛生園慰安会	1959年２月	永瀬清子	選評	
137	愛生	第13巻第４号	長島愛生園慰安会	1959年４月	永瀬清子	選評	
138	愛生	第13巻第５号	長島愛生園慰安会	1959年５月	永瀬清子	選評	
139	愛生	第13巻第５号	長島愛生園慰安会	1959年５月	永瀬清子	全国募集児童作文選評	
140	愛生	第13巻第５号	長島愛生園慰安会	1959年５月	永瀬清子	児童詩選評	
141	愛生	第13巻第６号	長島愛生園慰安会	1959年６月	永瀬清子	選評	
142	愛生	第13巻第７号	長島愛生園慰安会	1959年７月	永瀬清子	選評	
143	愛生	第13巻第８号	長島愛生園慰安会	1959年８月	永瀬清子	選評	
144	愛生	第13巻第９号	長島愛生園慰安会	1959年９月	永瀬清子	評	
145	愛生	第13巻第９号	長島愛生園慰安会	1959年９月	永瀬清子	書評・小泉雅二詩集「枯葉の童話」によせて	
146	愛生	第13巻第10号	長島愛生園慰安会	1959年10月	永瀬清子	十月号選評	
147	愛生	第13巻第11号	長島愛生園慰安会	1959年11月	永瀬清子	選評	
148	愛生	第13巻第12号	長島愛生園慰安会	1959年12月	永瀬清子	選評	
149	愛生	第14巻第１号	長島愛生園慰安会	1960年１月	永瀬清子	選評	
150	愛生	第14巻第２号	長島愛生園慰安会	1960年２月	永瀬清子	選評	
151	愛生	第14巻第３号	長島愛生園慰安会	1960年３月	永瀬清子	あれは樹だと	自作詩
152	愛生	第14巻第３号	長島愛生園慰安会	1960年３月	永瀬清子	選評	
153	愛生	第14巻第３号	長島愛生園慰安会	1960年３月	永瀬清子	志樹逸馬さんの死を悼む	故・志樹逸馬追悼集
154	愛生	第14巻第４号	長島愛生園慰安会	1960年４月	永瀬清子	選評	
155	愛生	第14巻第５号	長島愛生園慰安会	1960年５月	永瀬清子	選評	
156	愛生	第14巻第６号	長島愛生園慰安会	1960年６月	永瀬清子	詩選評	
157	愛生	第14巻第７号	長島愛生園慰安会	1960年７月	永瀬清子	選評	
158	愛生	第14巻第９号	長島愛生園慰安会	1960年９月	永瀬清子	選評	
159	楓	第23巻第11号	邑久光明園慰安会	1960年11月	永瀬清子	児童詩選評	
160	楓	第23巻第11号	邑久光明園慰安会	1960年11月	永瀬清子	詩選評	
161	愛生	第14巻第12号	長島愛生園慰安会	1960年12月	永瀬清子	選評	
162	愛生	第15巻第１号	長島愛生園慰安会	1961年１月	永瀬清子	選評	
163	愛生	第15巻第２号	長島愛生園慰安会	1961年２月	永瀬清子	ありし日の志樹逸馬さん	特集『志樹逸馬詩集』によせて
164	愛生	第15巻第３号	長島愛生園慰安会	1961年３月	永瀬清子	詩選評	
165	愛生	第15巻第４号	長島愛生園慰安会	1961年４月	永瀬清子	選評	
166	愛生	第15巻第５号	長島愛生園慰安会	1961年５月	永瀬清子	選評	
167	愛生	第15巻第７号	長島愛生園慰安会	1961年７月	永瀬清子	選評	
168	愛生	第15巻第10号	長島愛生園慰安会	1961年10月	永瀬清子	選評	
169	楓	第24巻第11号	邑久光明園慰安会	1961年11月	永瀬清子	児童詩選評	
170	楓	第24巻第11号	邑久光明園慰安会	1961年11月	永瀬清子	全国文芸募集詩選評	
171	愛生	第15巻第12号	長島愛生園慰安会	1961年12月	永瀬清子	評	
172	愛生	第16巻第１号	長島愛生園慰安会	1962年１月	永瀬清子	選評	
173	愛生	第16巻第３号	長島愛生園慰安会	1962年３月	永瀬清子	評	
174	愛生	第16巻第４号	長島愛生園慰安会	1962年４月	永瀬清子	評	
175	愛生	第16巻第５号	長島愛生園慰安会	1962年６月	永瀬清子	選評	
176	海図	第38号	海図の会	1962年６月	永瀬清子	はだか木に寄せて	塔和子第一詩集『はだか木』特集

No	書名	号数	発行所	刊行年月	著者名	表題	備考
177	愛生	第16巻第６号	長島愛生園慰安会	1962年７月	永瀬清子	選評	
178	愛生	第16巻第７号	長島愛生園慰安会	1962年８月	永瀬清子	＜詩＞	選のみ、評なし。
179	愛生	第16巻第８号	長島愛生園慰安会	1962年９月	永瀬清子	＜詩＞	選のみ、評なし。
180	点字愛生	第26号	長島愛生園慰安会	1962年９月	永瀬清子	選評	
181	愛生	第16巻第９号	長島愛生園慰安会	1962年10月	永瀬清子	書評・小泉雅二著裸形の会刊詩集「白い内部で」を読んで	
182	楓	第25巻第12号	邑久光明園慰安会	1962年12月	永瀬清子	選評	
183	愛生	第17巻第１号	長島愛生園慰安会	1963年１月	永瀬清子	評	
184	海図	第40号	海図の会	1963年２月	永瀬清子	手紙	特集・40号によせて
185	愛生	第17巻第２号	長島愛生園慰安会	1963年３月	永瀬清子	評	
186	愛生	第17巻第４号	長島愛生園慰安会	1963年５月	永瀬清子	選評	
187	愛生	第17巻第６号	長島愛生園慰安会	1963年７月	永瀬清子	評、選評	
188	愛生	第17巻第７号	長島愛生園慰安会	1963年８月	永瀬清子	選評	
189	点字愛生	第30号	長島愛生園慰安会	1963年９月	永瀬清子	選評	
190	愛生	第17巻第９号	長島愛生園慰安会	1963年10月	永瀬清子	選評	
191	楓	第26巻第10号	邑久光明園慰安会	1963年10月	永瀬清子	選評	
192	愛生	第18巻第６号	長島愛生園慰安会	1964年８月	永瀬清子	光田先生	自作詩。故・光田健輔追悼号
193	愛生	第18巻第８号	長島愛生園慰安会	1964年10月	永瀬清子	選評	
194	楓	第27巻第11号	邑久光明園慰安会	1964年11月	永瀬清子	詩選評	
195	点字愛生	第35号	長島愛生園慰安会	1964年12月	永瀬清子	選評	
196	点字愛生	第38号	長島愛生園慰安会	1965年９月	永瀬清子	選評	
197	楓	第28巻第12号	邑久光明園慰安会	1965年12月	永瀬清子	選評	
198	楓	第28巻第12号	邑久光明園慰安会	1965年12月	永瀬清子	アンケート回答	
199	点字愛生	第43号	長島愛生園慰安会	1966年９月	永瀬清子	選評	
200	楓	第29巻第11号	邑久光明園慰安会	1966年11月	永瀬清子	選後に	
201	点字愛生	第47号	長島愛生園慰安会	1967年９月	永瀬清子	評	
202	裸形	第35号	長島詩話会	1968年８月	永瀬清子	詩集『つくられた断層』への言葉	
203	点字愛生	第51号	長島愛生園慰安会	1968年９月	永瀬清子	選評	
204	楓	第31巻第11号	邑久光明園慰安会	1968年11月	永瀬清子	詩選評	
205	点字愛生	第55号	長島愛生園慰安会	1969年９月	永瀬清子	評	
206	青松	第27巻第２号	大島青松会	1970年２月	永瀬清子	（詩集「分身」批評特集）「分身」について	
207	裸形	第40号	長島詩話会	1970年３月	編集部	自分の立場で歴史を ー永瀬清子先生講演より	1969年11月５日開催の講演録。
208	楓	第33巻第11号	邑久光明園慰安会	1970年11月	永瀬清子	詩選評	
209	点字愛生	第60号	長島愛生園慰安会	1970年12月	永瀬清子	詩選評	
210	裸形	第43号	長島詩話会	1971年４月	永瀬清子 ・吉田稔	プラスの詩マイナスの詩	1971年２月７日開催の座談録。
211	点字愛生	第63号	長島愛生園慰安会	1971年10月	永瀬清子	詩選評	
212	楓	第34巻第11号	邑久光明園慰安会	1971年11月	永瀬清子	詩選評	
213	愛生	第26巻第１号	長島愛生園慰安会	1972年１月	永瀬清子	追悼・書評・「小泉雅二詩集」に寄せて	読売新聞、1971年６月27日、「離島の文学―ハンセン氏病の詩人たちと著書」より。
214	点字愛生	第67号	長島愛生園慰安会	1972年10月	永瀬清子	詩選評	
215	楓	第35巻第11号	邑久光明園慰安会	1972年11月	永瀬清子	選評	
216	白杖	第76号	邑久光明園慰安会	1973年12月	永瀬清子	詩選評	
217	裸形	第54号	長島詩話会	1978年８月	編集部	永瀬清子先生をむかえて（一）	1978年４月20日開催の座談録。
218	裸形	第55号	長島詩話会	1978年12月	編集部	座談会・永瀬清子先生を迎えて（二）	1978年４月20日開催の座談録。

表３．永瀬清子ハンセン病関係文献リスト（『黄薔薇』）

No	書名	通巻	発行所	刊行年月日	著者名	表題	備考
1	黄薔薇	創刊号	黄薔薇発行所	1952年８月	Ｋ・Ｎ（永瀬清子）	長島詩謡会『緑の岩礁』	詩集評。
2	黄薔薇	第３号	黄薔薇発行所	1952年12月	永瀬清子	長島詩謡会『小島に生きる』	詩集評。
3	黄薔薇	第４号	黄薔薇発行所	1953年２月	永瀬清子	編集後記	1953年１月18日に「黄薔薇」同人で長島愛生園訪問。
4	黄薔薇	第６号	黄薔薇発行所	1953年６月	永瀬清子	『いのちの芽』	書評。
5	黄薔薇	第８号	黄薔薇発行所	1953年10月	永瀬清子	編集後記	「心をなやますことの一つは又長島の人々の事でもありました」と記事。
6	黄薔薇	第14号	黄薔薇発行所	1954年10月	永瀬清子	癩について	自作詩。『楓』第８巻第11号（1954年11月）に転載。
7	黄薔薇	第14号	黄薔薇発行所	1954年10月	永瀬清子	編集後記	長島愛生園・邑久光明園訪問。邑久光明園から出る詩集（『光の杖』）についてコメント。
8	黄薔薇	第20号	黄薔薇発行所	1955年10月	永瀬清子	光明園詩作会『光の杖』	詩集「批評と紹介」。
9	黄薔薇	第20号	黄薔薇発行所	1955年10月	永瀬清子	島村静雨『狂った季節のなかで』	詩集「批評と紹介」。
10	黄薔薇	第20号	黄薔薇発行所	1955年10月	永瀬清子	一九五五年夏	永瀬清子、上林猷夫、真壁仁と長島愛生園、邑久光明園訪問。
11	黄薔薇	第29号	黄薔薇	1957年５月	永瀬清子	編集後記	長島訪問について言及。
12	黄薔薇	第34号	黄薔薇	1958年５月	永瀬清子	編集後記	長島愛生園合同詩集『白い波紋』に言及。
13	黄薔薇	第36号	黄薔薇社	1959年１月	永瀬清子	編集後記	河野進『雑草のような母』が大島青松園に盲人会館をたてるために出版されたとの記事。
14	黄薔薇	第37号	黄薔薇社	1959年３月	永瀬清子	栗生楽泉園『草津の柵』	「詩集寸評」欄。
15	黄薔薇	第37号	黄薔薇社	1959年３月	永瀬清子	編集後記	高良とみ、藤原菜穂子と共に長島訪問の記述あり。
16	黄薔薇	第39号	黄薔薇社	1959年９月	永瀬清子	編集後記	小泉雅二詩集『枯葉の童話』に言及。
17	黄薔薇	第43号	黄薔薇社	1960年９月	永瀬清子	編集後記	６月はじめの大島青松園訪問、塔和子と初対面の記事。
18	黄薔薇	第43号	黄薔薇社	1960年９月	永瀬清子	編集後記	７月８～10日小野十三郎来岡、長島愛生園、邑久光明園の病友からも喜ばれたとの記事。
19	黄薔薇	第44号	黄薔薇社	1961年１月	無記名（永瀬清子か）	ありし日の志樹逸馬さん	志樹逸馬追悼。
20	黄薔薇	第44号	黄薔薇社	1961年１月	永瀬清子	編集後記	「六〇年は塔さん（略）新らしい人をみつけた」と記事。
21	黄薔薇	第48号	黄薔薇社	1962年４月	永瀬清子	「はだか木」について	特集・紙上出版記念会　塔和子詩集『はだか木』について
22	黄薔薇	第48号	黄薔薇社	1962年４月	永瀬清子	編集後記	塔和子について紹介。
23	黄薔薇	第66号	黄薔薇社	1969年12月	永瀬清子	編集後記	塔和子詩集『分身』出版に言及。次号を出版記念号にしたい。
24	黄薔薇	第67号	黄薔薇社	1970年５月	永瀬清子	（無題）	紙上出版記念会・塔和子詩集『分身』について。
25	黄薔薇	第67号	黄薔薇社	1970年５月	永瀬清子	編集後記	塔和子に言及。
26	黄薔薇	第71号	黄薔薇社	1971年８月	永瀬清子	編集後記	『藤本とし随筆集』『小泉雅二詩集』塔和子『分身』について読売新聞に書いたと言及。
27	黄薔薇	第72号	黄薔薇社	1971年12月	永瀬清子	編集後記	秋田穂月を紹介。
28	黄薔薇	第76号	黄薔薇社	1973年11月	永瀬清子	塔和子『エバの裔』によせて	
29	黄薔薇	第76号	黄薔薇社	1973年11月	永瀬清子	編集後記	塔和子『エバの裔』に言及。
30	黄薔薇	第78号	黄薔薇社	1974年10月	永瀬清子	編集後記	塔和子が日本現代詩人会の会員となったことを紹介。
31	黄薔薇	第83号	黄薔薇社	1976年８月	永瀬清子	塔和子詩集『第一日の孤独』について	
32	黄薔薇	第90号	黄薔薇社	1978年５月	永瀬清子	編集後記	４月20日長島愛生園訪問記事。
33	黄薔薇	第93号	黄薔薇社	1979年３月	永瀬清子	編集後記	塔和子Ｈ氏賞候補と言及。
34	黄薔薇	第94号	黄薔薇社	1979年８月	永瀬清子	会合三つ	４月13日上林猷夫、間野捷魯、重政順平を誘って長島詩話会の十数名と座談会。島田等、庸沢陵、森春樹、小島浩二ら参加。
35	黄薔薇	第98号	黄薔薇社	1980年10月	永瀬清子	塔和子詩集『いちま人形』	新刊紹介（一）。
36	黄薔薇	第98号	黄薔薇社	1980年10月	永瀬清子	編集後記	塔和子の詩に言及。
37	黄薔薇	第108号	黄薔薇社	1983年11月	永瀬清子	編集後記	塔和子詩集『いのちの宴』に言及。
38	黄薔薇	第110号	黄薔薇社	1984年７月	永瀬清子	塔和子詩集「いのちの宴」に	
39	黄薔薇	第117号	黄薔薇社	1986年11月	永瀬清子	編集後記	塔和子詩集『愛の詩集』に言及。
40	黄薔薇	第118号	黄薔薇社	1987年４月	永瀬清子	編集後記	塔和子の詩集刊行に言及。
41	黄薔薇	第121号	黄薔薇社	1988年６月	永瀬清子	編集後記	長島大橋に言及。
42	黄薔薇	第122号	黄薔薇社	1989年１月	永瀬清子	塔和子詩集『未知なる知者よ』	
43	黄薔薇	第122号	黄薔薇社	1989年１月	永瀬清子	心辺と身辺　’88年の秋	長島大橋の記念式典に出席した大江満雄と、河田正志、庸沢陵と岡山で会食。
44	黄薔薇	第124号	黄薔薇編集部	1989年９月	永瀬清子	塔和子詩集『不明の花』	短評。
45	黄薔薇	第126号	黄薔薇編集部	1990年６月	永瀬清子	中山秋夫句集『父子独楽』について	「山陽新聞「地域の本」による」と記載。
46	黄薔薇	第135号	黄薔薇編集部	1993年３月	永瀬清子	心辺と身辺　一四十周年号のあとに一	中山秋夫の川柳について述べる。

表４．永瀬清子ハンセン病関係文献リスト（園内単行本）

No	著者名	表題	書名	出版社	刊行年	備考
1	永瀬清子	序	長島詩謡会編『緑の岩礁』	長島愛生園慰安会	1951年	
2	永瀬清子	あとがき	邑久光明園詩作会編『光の杖』	邑久光明園慰安会	1954年	小野十三郎「序文」。
3	永瀬清子	序	長島詩話会編『白い波紋』	長島詩話会	1957年	
4	永瀬清子	序	『小泉雅二詩集』	現代詩工房	1971年	
5	永瀬清子	序	庸沢陵『砂漠の星座』	私家版	1974年	
6	永瀬清子	跋	塔和子『第一日の孤独』	蝸牛社	1976年	大岡信・題字。
7	永瀬清子	序	小村義夫『花を活ける女』	長島詩話会	1979年	永瀬清子・カット。

表５．永瀬清子ハンセン病関係文献リスト（永瀬清子単著）

No	著者名	表題	書名	出版社	刊行年	備考
1	永瀬清子	長島（一九五〇年）	『女詩人の手帖』	日本文教出版	1952年	1950年の長島愛生開園20周年の記念式典に出席。
2	永瀬清子	光の角度	『流れる髪　短章集（２）』	思潮社	1977年	邑久光明園の堂崎しげるについて。
3	永瀬清子	藤本としさん	『流れる髪　短章集（２）』	思潮社	1977年	邑久光明園の藤本としについて。
4	永瀬清子	小泉雅一	『流れる髪　短章集（２）』	思潮社	1977年	長島愛生園の小泉雅二について。名前が「雅一」となっている。
5	永瀬清子	光田健輔先生の祝賀会	『かく逢った』	編集工房ノア	1981年	1950年の長島愛生開園20周年の記念式典に出席。
6	永瀬清子	幸と不幸の境界	『うぐいすの招き　日々の紀行』	れんが書房新社	1983年	長島愛生園の庸沢陵、島田等、栗生楽泉園の小林弘明、と岡山で会う内容。
7	永瀬清子	長島―（一九五〇年）	『光っている窓』	編集工房ノア	1984年	１の再録。
8	永瀬清子	インドへの旅	『すぎ去ればすべてなつかしい日々』	福武書店	1990年	光田健輔の指示でインドのハンセン病病院を訪問。

表６．永瀬清子ハンセン病関係文献リスト（永瀬清子以外・園内誌）

No	書名	号数	刊行年月	著者名	表題	備考
1	楓	第９巻第５号	1955年５月	編集部	詩作会便り　永瀬清子先生渡印	
2	愛生	第９巻第６号	1955年６月	『黄薔薇』同人	アジアの友へ	
3	愛生	第９巻第６号	1955年６月	編集部	詩人　永瀬清子先生、アジア諸国会議へ出席 ―平和を求めて―	
4	愛生	第９巻第６号	1955年６月	森春樹	永瀬先生に寄す	
5	青松	第17巻第９号	1960年９月	黒田義雄	長（ママ）瀬清子さんを迎えて	
6	愛生	第14巻第10号	1960年10月	庸沢陵	詩人小野十三郎・永瀬清子先生一行三名	写真。
7	海図	第32号	1960年10月	黒田義雄	永瀬清子さんを迎えて	『青松』第17巻第９号（1960年９月）と同内容。
8	裸形	第52号	1977年４月	島田等	病む奢り	永瀬清子『短章集流れる髪』書評。
9	白杖	第153号	1998年４月	中山秋夫	思い出すままに（詩人・永瀬清子先生を偲んで	
10	楓	通巻第497号	2004年５月	牧野正直	詩人・永瀬清子のこと	
11	愛生	第64巻第04号	2010年８月	疋田邦男	永瀬清子と長島愛生園―島田等との交流―	
12	愛生	第67巻第１号	2013年２月	疋田邦男	詩人・永瀬清子と長島―長島詩謡会の時代―	
13	愛生	第67巻第２号	2013年４月	疋田邦男	詩人・永瀬清子と長島② ―長島詩話会の時代―	
14	愛生	第67巻第３号	2013年６月	疋田邦男	詩人・永瀬清子と長島③ ―長島詩話会の誕生―（２）	
15	愛生	第67巻第４号	2013年８月	疋田邦男	詩人・永瀬清子と長島④ ―「黄薔薇」同人の訪問―（前編）	
16	愛生	第67巻第５号	2013年９月	疋田邦男	詩人・永瀬清子と長島⑤ ―「黄薔薇」同人の訪問―（後編）	
17	愛生	第67巻第６号	2013年11月	疋田邦男	詩人・永瀬清子と長島⑥ ―ニューエイジ詩集「いのちの芽」の波紋―（前編）	
18	愛生	第68巻第１号	2014年１月	疋田邦男	詩人・永瀬清子と長島⑦ ―ニューエイジ詩集「いのちの芽」の波紋―（後編）	
19	愛生	第68巻第３号	2014年６月	疋田邦男	詩人・永瀬清子と長島⑧ ―第三アンソロジー「白い波紋」の意味―（前編）	
20	愛生	第68巻第４号	2014年８月	疋田邦男	詩人・永瀬清子と長島⑨ ―第三アンソロジー「白い波紋」の意味―（後編）	
21	愛生	第68巻第５号	2014年10月	疋田邦男	詩人・永瀬清子と長島⑩ ―同人誌「裸形」誕生―（前編）	
22	愛生	第68巻第６号	2014年12月	疋田邦男	詩人・永瀬清子と長島⑪ ―同人誌「裸形」誕生―（後編）	
23	愛生	第69巻第１号	2015年２月	疋田邦男	詩人・永瀬清子と長島⑫ ―詩画展と第４アンソロジー「つくられた断層」―（前編）	
24	愛生	第69巻第４号	2015年８月	疋田邦男	詩人・永瀬清子と長島⑬ ―詩画展と第４アンソロジー「つくられた断層」―（後編）	
25	愛生	第69巻第５号	2015年10月	疋田邦男	詩人・永瀬清子と長島⑭ ―個人詩集が刊行される時代―（前編）	
26	愛生	第69巻第６号	2015年12月	疋田邦男	詩人・永瀬清子と長島⑮ ―個人詩集が刊行される時代―（中編）	
27	愛生	第70巻第１号	2016年２月	疋田邦男	詩人・永瀬清子と長島⑯ ―個人詩集が刊行される時代―（後編）	
28	愛生	第70巻第３号	2016年６月	疋田邦男	詩人・永瀬清子と長島⑰ ―長島詩話会の終結―	

表７．永瀬清子ハンセン病関係文献リスト（永瀬清子以外・『黄薔薇』）

No	書名	通巻	発行所	刊行年月日	著者名	表題	備考
1	黄薔薇	第４号	黄薔薇発行所	1953年２月	小林美和子	長島訪問記（一）	手巾の言葉
2	黄薔薇	第４号	黄薔薇発行所	1953年２月	難波道子	長島訪問記（二）	手巾の言葉
3	黄薔薇	第７号	黄薔薇発行所	1953年８月	志樹逸馬	黄薔薇へ寄せる	アンケート特集
4	黄薔薇	第31号	黄薔薇	1957年９月	島村静雨	生きる	
5	黄薔薇	第32号	黄薔薇	1957年12月	堂崎しげる	夏の海	
6	黄薔薇	第34号	黄薔薇	1958年５月	堂崎しげる	光の終焉	目次に作品名無し。
7	黄薔薇	第37号	黄薔薇社	1959年３月	島村静雨	教訓	
8	黄薔薇	第38号	黄薔薇社	1959年６月	島村静雨	ゴッホ展にて	
9	黄薔薇	第39号	黄薔薇社	1959年９月	島村静雨	広島にて	
10	黄薔薇	第40号	黄薔薇社	1959年12月	島村静雨	紙ひとえの	
11	黄薔薇	第41号	黄薔薇社	1960年３月	島村静雨	菊の葩びらによせて	
12	黄薔薇	第41号	黄薔薇社	1960年３月	塔和子	不幸の分量	目次に「塔・笛の欄」とあるのは誤り。
13	黄薔薇	第42号	黄薔薇社	1960年５月	塔和子	烏	
14	黄薔薇	第42号	黄薔薇社	1960年５月	島村静雨	みどりの歌	
15	黄薔薇	第43号	黄薔薇社	1960年９月	塔和子	草	
16	黄薔薇	第44号	黄薔薇社	1961年１月	志樹逸馬	静けさの中に私は	
17	黄薔薇	第44号	黄薔薇社	1961年１月	塔和子	ゴムマリ	
18	黄薔薇	第44号	黄薔薇社	1961年１月	塔和子	直線	
19	黄薔薇	第44号	黄薔薇社	1961年１月	塔和子	木の葉	
20	黄薔薇	第44号	黄薔薇社	1961年１月	島村静雨	氷河期	
21	黄薔薇	第45号	黄薔薇社	1961年３月	塔和子	冬	
22	黄薔薇	第45号	黄薔薇社	1961年３月	島村静雨	蟹	
23	黄薔薇	第46号	黄薔薇社	1961年８月	塔和子	挽歌	
24	黄薔薇	第47号	黄薔薇社	1961年12月	塔和子	未知	
25	黄薔薇	第48号	黄薔薇社	1962年４月	塔和子	死	
26	黄薔薇	第48号	黄薔薇社	1962年４月	塔和子	断片	紙上出版記念会　塔和子詩集『はだか木』について
27	黄薔薇	第48号	黄薔薇社	1962年４月	中石としお	その周辺	紙上出版記念会　塔和子詩集『はだか木』について
28	黄薔薇	第49号・第50号合併号	黄薔薇社	1962年９月	塔和子	夏	
29	黄薔薇	第51号	黄薔薇社	1963年１月	塔和子	熱	
30	黄薔薇	第52号	黄薔薇社	1963年６月	塔和子	私ではない	
31	黄薔薇	第53号	黄薔薇社	1963年12月	塔和子	船	
32	黄薔薇	第54号	黄薔薇社	1964年６月	塔和子	病気	
33	黄薔薇	第55号	黄薔薇社	1964年12月	塔和子	目覚めたるもの	
34	黄薔薇	第56号	黄薔薇社	1965年６月	塔和子	秘密	
35	黄薔薇	第57号	黄薔薇社	1965年10月	塔和子	不遜	
36	黄薔薇	第58号	黄薔薇社	1966年５月	塔和子	春景	
37	黄薔薇	第59号	黄薔薇社	1966年11月	塔和子	花と人物	
38	黄薔薇	第60号	黄薔薇社	1967年５月	塔和子	私は川	
39	黄薔薇	第61号	黄薔薇社	1967年11月	塔和子	孤独なる	
40	黄薔薇	第62号	黄薔薇社	1968年５月	塔和子	変身を	
41	黄薔薇	第63号	黄薔薇社	1968年９月	塔和子	さびしさ	
42	黄薔薇	第64号	黄薔薇社	1968年12月	塔和子	知られざる極北	
43	黄薔薇	第65号	黄薔薇社	1969年６月	塔和子	結婚	
44	黄薔薇	第66号	黄薔薇社	1969年12月	塔和子	輪廻	
45	黄薔薇	第67号	黄薔薇社	1970年５月	塔和子	顔	紙上出版記念会　塔和子詩集『分身』について
46	黄薔薇	第67号	黄薔薇社	1970年５月	香川紘子	（無題）	紙上出版記念会　塔和子詩集『分身』について
47	黄薔薇	第67号	黄薔薇社	1970年５月	新川和江	（無題）	紙上出版記念会　塔和子詩集『分身』について
48	黄薔薇	第67号	黄薔薇社	1970年５月	吉田稔	（無題）	紙上出版記念会　塔和子詩集『分身』について
49	黄薔薇	第68号	黄薔薇社	1970年９月	塔和子	ものを云う静物	
50	黄薔薇	第69号	黄薔薇社	1970年11月	塔和子	鏡の中の親友	
51	黄薔薇	第70号	黄薔薇社	1971年４月	塔和子	創作	
52	黄薔薇	第71号	黄薔薇社	1971年８月	塔和子	父	
53	黄薔薇	第72号	黄薔薇社	1971年12月	塔和子	罰	
54	黄薔薇	第72号	黄薔薇社	1971年12月	塔和子	冬期	

No	書名	通巻	発行所	刊行年月日	著者名	表題	備考
55	黄薔薇	第72号	黄薔薇社	1971年12月	秋田穂月	海と夕焼け	
56	黄薔薇	第73号	黄薔薇社	1972年４月	塔和子	肉体	
57	黄薔薇	第74号	黄薔薇社	1972年９月	塔和子	痛み	
58	黄薔薇	第74号	黄薔薇社	1972年９月	塔和子	鉄骨	
59	黄薔薇	第75号	黄薔薇社	1973年８月	塔和子	朝	
60	黄薔薇	第76号	黄薔薇社	1973年11月	塔和子	生	
61	黄薔薇	第76号	黄薔薇社	1973年11月	塔和子	食事	
62	黄薔薇	第76号	黄薔薇社	1973年11月	村野四郎	塔和子『エバの裔』によせて	
63	黄薔薇	第76号	黄薔薇社	1973年11月	新川和江	塔和子『エバの裔』によせて	
64	黄薔薇	第76号	黄薔薇社	1973年11月	片岡文雄	塔和子『エバの裔』によせて	
65	黄薔薇	第77号	黄薔薇社	1974年７月	塔和子	領土	
66	黄薔薇	第78号	黄薔薇社	1974年10月	塔和子	一本の骨	
67	黄薔薇	第78号	黄薔薇社	1974年10月	塔和子	ひとつの世界	
68	黄薔薇	第79号	黄薔薇社	1975年６月	塔和子	深夜	
69	黄薔薇	第79号	黄薔薇社	1975年６月	塔和子	心	
70	黄薔薇	第79号	黄薔薇社	1975年６月	国本稔	山原にこんな昔があった	
71	黄薔薇	第80号	黄薔薇社	1975年10月	塔和子	美	
72	黄薔薇	第80号	黄薔薇社	1975年10月	塔和子	やすらぎ	
73	黄薔薇	第80号	黄薔薇社	1975年10月	塔和子	詩集『日日の化石』によせて	
74	黄薔薇	第81号	黄薔薇社	1976年３月	塔和子	山	
75	黄薔薇	第81号	黄薔薇社	1976年３月	塔和子	耳	
76	黄薔薇	第82号	黄薔薇社	1976年７月	塔和子	刺される	
77	黄薔薇	第82号	黄薔薇社	1976年７月	塔和子	暮色の中で	
78	黄薔薇	第82号	黄薔薇社	1976年７月	塔和子	虫	
79	黄薔薇	第83号	黄薔薇社	1976年８月	森崎和江	塔和子詩集 『第一日の孤独』について	
80	黄薔薇	第83号	黄薔薇社	1976年８月	剣（ママ）持俊彦	塔和子詩集 『第一日の孤独』について	
81	黄薔薇	第85号	黄薔薇社	1977年４月	塔和子	目にしたものだけ	
82	黄薔薇	第85号	黄薔薇社	1977年４月	塔和子	魚	
83	黄薔薇	第92号	黄薔薇社	1978年11月	長尾佳枝	書評・塔和子詩集 『聖なるものは木』	
84	黄薔薇	第93号	黄薔薇社	1979年３月	塔和子	額縁	
85	黄薔薇	第94号	黄薔薇社	1979年８月	塔和子	さわらないで	
86	黄薔薇	第94号	黄薔薇社	1979年８月	塔和子	彩	
87	黄薔薇	第94号	黄薔薇社	1979年８月	国本稔	狂った風景	
88	黄薔薇	第95号	黄薔薇社	1979年11月	塔和子	苦悩	
89	黄薔薇	第95号	黄薔薇社	1979年11月	塔和子	楽	
90	黄薔薇	第95号	黄薔薇社	1979年11月	国本稔	別れの詩	
91	黄薔薇	第96号	黄薔薇社	1980年３月	塔和子	へんなやつ	
92	黄薔薇	第96号	黄薔薇社	1980年３月	塔和子	罠	
93	黄薔薇	第97号	黄薔薇社	1980年６月	塔和子	ひとつの夜	
94	黄薔薇	第97号	黄薔薇社	1980年６月	塔和子	受信機	
95	黄薔薇	第97号	黄薔薇社	1980年６月	国本稔	忍耐	
96	黄薔薇	第98号	黄薔薇社	1980年10月	塔和子	鳥	
97	黄薔薇	第98号	黄薔薇社	1980年10月	塔和子	胸の泉に	
98	黄薔薇	第98号	黄薔薇社	1980年10月	国本稔	腹の中の虫	
99	黄薔薇	第99号	黄薔薇社	1980年12月	塔和子	指	
100	黄薔薇	第99号	黄薔薇社	1980年12月	国本稔	猟犬	
101	黄薔薇	第100号	黄薔薇社	1981年５月	塔和子	瓶	
102	黄薔薇	第100号	黄薔薇社	1981年５月	国本稔	柩の中から	
103	黄薔薇	第101号	黄薔薇社	1981年９月	国本稔	尋ね人	
104	黄薔薇	第102号	黄薔薇社	1981年12月	国本稔	化石	
105	黄薔薇	第103号	黄薔薇社	1982年４月	塔和子	雪	
106	黄薔薇	第103号	黄薔薇社	1982年４月	塔和子	召天	
107	黄薔薇	第103号	黄薔薇社	1982年４月	（無記名）	国本稔詩集『化石』	新刊紹介
108	黄薔薇	第104号	黄薔薇社	1982年７月	塔和子	梨	
109	黄薔薇	第104号	黄薔薇社	1982年７月	塔和子	吠える	
110	黄薔薇	第104号	黄薔薇社	1982年７月	国本稔	いのち	
111	黄薔薇	第105号	黄薔薇社	1982年11月	塔和子	言葉	

No	書名	通巻	発行所	刊行年月日	著者名	表題	備考
112	黄薔薇	第105号	黄薔薇社	1982年11月	塔和子	白い闇	
113	黄薔薇	第106号	黄薔薇社	1983年３月	塔和子	光	
114	黄薔薇	第106号	黄薔薇社	1983年３月	塔和子	球根	
115	黄薔薇	第109号	黄薔薇社	1984年３月	塔和子	なろうとするとき	
116	黄薔薇	第109号	黄薔薇社	1984年３月	塔和子	かざしたものは	
117	黄薔薇	第109号	黄薔薇社	1984年３月	財部鳥子	塔和子『いのちの宴』について	
118	黄薔薇	第109号	黄薔薇社	1984年３月	殿内芳樹	塔和子『いのちの宴』について	
119	黄薔薇	第109号	黄薔薇社	1984年３月	星野徹	塔和子『いのちの宴』について	
120	黄薔薇	第109号	黄薔薇社	1984年３月	及川均	塔和子『いのちの宴』について	
121	黄薔薇	第109号	黄薔薇社	1984年３月	石原武	塔和子『いのちの宴』について	
122	黄薔薇	第109号	黄薔薇社	1984年３月	石川逸子	塔和子『いのちの宴』について	
123	黄薔薇	第110号	黄薔薇社	1984年７月	（無記名）	近刊紹介　志樹逸馬詩集『島の四季』	無記名だが、永瀬清子執筆と思われる内容。
124	黄薔薇	第111号	黄薔薇社	1984年10月	塔和子	秋	
125	黄薔薇	第111号	黄薔薇社	1984年10月	塔和子	羊	
126	黄薔薇	第112号	黄薔薇社	1985年４月	塔和子	いのち	
127	黄薔薇	第112号	黄薔薇社	1985年４月	塔和子	あるとき	
128	黄薔薇	第113号	黄薔薇社	1985年６月	塔和子	光っている世界	
129	黄薔薇	第113号	黄薔薇社	1985年６月	塔和子	バラ	
130	黄薔薇	第114号	黄薔薇社	1985年10月	塔和子	笑のよってくるところ	
131	黄薔薇	第115号	黄薔薇社	1986年４月	塔和子	燠	
132	黄薔薇	第116号	黄薔薇社	1986年８月	塔和子	距離	
133	黄薔薇	第116号	黄薔薇社	1986年８月	塔和子	花	
134	黄薔薇	第117号	黄薔薇社	1986年11月	塔和子	遠く見ながら	
135	黄薔薇	第118号	黄薔薇社	1987年４月	塔和子	行く	
136	黄薔薇	第118号	黄薔薇社	1987年４月	塔和子	罠	
137	黄薔薇	第119号	黄薔薇社	1987年８月	塔和子	一匹の虫	
138	黄薔薇	第119号	黄薔薇社	1987年８月	高田千尋	国本稔『終着駅からの手紙』	
139	黄薔薇	第120号	黄薔薇社	1988年１月	塔和子	自然は私より	
140	黄薔薇	第120号	黄薔薇社	1988年１月	塔和子	虹	
141	黄薔薇	第120号	黄薔薇社	1988年１月	高田千尋	編集後記	国本稔『終着駅からの手紙』に言及。
142	黄薔薇	第121号	黄薔薇社	1988年６月	塔和子	音	
143	黄薔薇	第121号	黄薔薇社	1988年６月	塔和子	雑念	
144	黄薔薇	第122号	黄薔薇社	1989年１月	塔和子	いたみ	
145	黄薔薇	第123号	黄薔薇編集部	1989年５月	塔和子	いのちのしずく	
146	黄薔薇	第123号	黄薔薇編集部	1989年５月	塔和子	水の形態	
147	黄薔薇	第124号	黄薔薇編集部	1989年９月	塔和子	大地の上に	
148	黄薔薇	第124号	黄薔薇編集部	1989年９月	塔和子	立っている心	
149	黄薔薇	第125号	黄薔薇編集部	1990年１月	塔和子	挨拶	
150	黄薔薇	第125号	黄薔薇編集部	1990年１月	塔和子	外出	
151	黄薔薇	第126号	黄薔薇編集部	1990年６月	塔和子	妖精	
152	黄薔薇	第126号	黄薔薇編集部	1990年６月	塔和子	食事	
153	黄薔薇	第128号	黄薔薇編集部	1991年１月	（無記名）	塔和子詩集『時間の外から』	新刊紹介
154	黄薔薇	第128号	黄薔薇編集部	1991年１月	三好豊一郎	（無題）	紙上祝賀会　塔和子詩集『時間の外から』
155	黄薔薇	第128号	黄薔薇編集部	1991年１月	右原彪	（無題）	紙上祝賀会　塔和子詩集『時間の外から』
156	黄薔薇	第128号	黄薔薇編集部	1991年１月	今辻和典	（無題）	紙上祝賀会　塔和子詩集『時間の外から』
157	黄薔薇	第128号	黄薔薇編集部	1991年１月	千葉宣一	（無題）	紙上祝賀会　塔和子詩集『時間の外から』
158	黄薔薇	第128号	黄薔薇編集部	1991年１月	水橋晋	（無題）	紙上祝賀会　塔和子詩集『時間の外から』
159	黄薔薇	第128号	黄薔薇編集部	1991年１月	井奥行彦	（無題）	紙上祝賀会　塔和子詩集『時間の外から』
160	黄薔薇	第128号	黄薔薇編集部	1991年１月	塔和子	蝶	紙上祝賀会　塔和子詩集『時間の外から』
161	黄薔薇	第128号	黄薔薇編集部	1991年１月	塔和子	いのちのしずく	紙上祝賀会　塔和子詩集『時間の外から』
162	黄薔薇	第129号	黄薔薇編集部	1991年４月	塔和子	秩序の中で	
163	黄薔薇	第129号	黄薔薇編集部	1991年４月	塔和子	姿	
164	黄薔薇	第130号	黄薔薇編集部	1991年９月	塔和子	羽	
165	黄薔薇	第130号	黄薔薇編集部	1991年９月	塔和子	夢	
166	黄薔薇	第131号	黄薔薇編集部	1991年12月	塔和子	そいつ	
167	黄薔薇	第131号	黄薔薇編集部	1991年12月	塔和子	覚める	
168	黄薔薇	第132号	黄薔薇編集部	1992年４月	塔和子	鬼	
169	黄薔薇	第133号	黄薔薇編集部	1992年７月	塔和子	風景	
170	黄薔薇	第133号	黄薔薇編集部	1992年７月	塔和子	ぼーと明るんで	

No	書名	通巻	発行所	刊行年月日	著者名	表題	備考
171	黄薔薇	第133号	黄薔薇編集部	1992年７月	高田千尋	島田等詩集『返礼』（自家版）	
172	黄薔薇	第134号	黄薔薇編集部	1992年11月	塔和子	手	40周年記念特集号　塔和子の現在（詩５篇他）
173	黄薔薇	第134号	黄薔薇編集部	1992年11月	塔和子	泡沫の中で	40周年記念特集号　塔和子の現在（詩５篇他）
174	黄薔薇	第134号	黄薔薇編集部	1992年11月	塔和子	外出	40周年記念特集号　塔和子の現在（詩５篇他）
175	黄薔薇	第134号	黄薔薇編集部	1992年11月	塔和子	集めている	40周年記念特集号　塔和子の現在（詩５篇他）
176	黄薔薇	第134号	黄薔薇編集部	1992年11月	塔和子	手の上にのせて	40周年記念特集号　塔和子の現在（詩５篇他）
177	黄薔薇	第134号	黄薔薇編集部	1992年11月	塔和子	「黄薔薇」四十周年によせて	40周年記念特集号　塔和子の現在（詩５篇他）
178	黄薔薇	第135号	黄薔薇編集部	1993年３月	塔和子	新居	
179	黄薔薇	第135号	黄薔薇編集部	1993年３月	塔和子	無慚のあと	
180	黄薔薇	第136号	黄薔薇編集部	1993年７月	米田栄作	詩集案内　塔和子詩集『日常』	
181	黄薔薇	第136号	黄薔薇編集部	1993年７月	塔和子	私が手にしたもの	
182	黄薔薇	第136号	黄薔薇編集部	1993年７月	塔和子	秋	
183	黄薔薇	第137号	黄薔薇編集部	1993年10月	塔和子	貪婪な私は	
184	黄薔薇	第137号	黄薔薇編集部	1993年10月	塔和子	朝	
185	黄薔薇	第137号	黄薔薇編集部	1993年10月	高田千尋	編集後記	塔和子詩集『日常』紹介。
186	黄薔薇	第138号	黄薔薇編集部	1994年２月	塔和子	明暗	
187	黄薔薇	第138号	黄薔薇編集部	1994年２月	塔和子	平凡	
188	黄薔薇	第138号	黄薔薇編集部	1994年２月	高田千尋	塔和子詩集『日常』について	
189	黄薔薇	第139号	黄薔薇編集部	1994年６月	塔和子	影絵	
190	黄薔薇	第139号	黄薔薇編集部	1994年６月	塔和子	占い	
191	黄薔薇	第140号	黄薔薇編集部	1994年９月	塔和子	釣り糸	
192	黄薔薇	第140号	黄薔薇編集部	1994年９月	塔和子	餓鬼	
193	黄薔薇	第141号	黄薔薇編集部	1995年１月	塔和子	土地	
194	黄薔薇	第141号	黄薔薇編集部	1995年１月	塔和子	虫	
195	黄薔薇	第142号	黄薔薇編集部	1995年４月	塔和子	いちじく	
196	黄薔薇	第142号	黄薔薇編集部	1995年４月	川崎正明	塔和子詩集『愛の詩』を読んで	
197	黄薔薇	第143号	黄薔薇編集部	1995年７月	塔和子	祈り	永瀬清子追悼号
198	黄薔薇	第143号	黄薔薇編集部	1995年７月	島田等	永瀬さんと長島詩話会	永瀬清子追悼号
199	黄薔薇	第143号	黄薔薇編集部	1995年７月	釼持俊彦	執筆者紹介と編集後記	永瀬清子追悼号、島田等を紹介。